

PHILIPPINE CAMP 2015

Reported by FIWC-Kyushu



2015/2/13 ~ 3/14

BRGY Bonoy,

Matag-ob, Leyte

目次

- 1、はじめに
- 2、FIWC とは
- 3、重要人物紹介
- 4、ワーク地・訪問地紹介
- 5、活動日程
- 6、ワーク報告



- 7、教育活動報告
- 8、生活状況
- 9、各係活動報告
 - ・会計
 - ・イベント
 - ・保健
 - ・ホームステイ
 - ・KP (Kitchen Police)
- 10、他己紹介
- 11、感想

1、はじめに

私たちのワークキャンプの第1歩。
それは村人達と友達になること。仲間になることです。

あなたの隣で友達が一生懸命働いています。
「手伝おうか？」自然にこの言葉が出てくるはずです。

人種が違って、言葉や文化が違って、
“友達”の定義は世界共通。

大好きな友達の力になりたいから。私たちは一生懸命働きます。
日本人の友達が頑張ってるから、村人たちも一生懸命手伝ってくれます。

友達と一緒に作ったものだから、
だから一生大切に使い続けてくれます。

これが私たちのワークキャンプです。



虹～make our future～

同じ人間どうし。心は必ずつながりあえる。

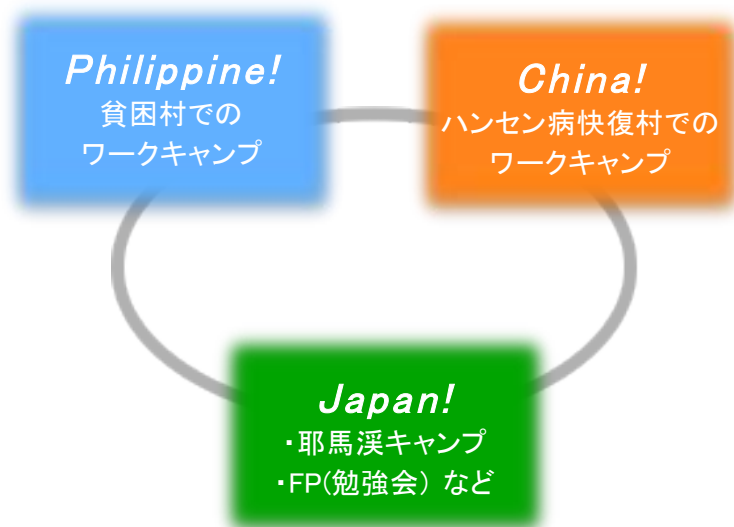
フィリピンと日本をつなぐ、
みんなの心と心をつなぐ虹となろう。

キラキラ輝く明るい未来に、
またいつか笑顔で再会できるように。

2015年 フィリピンキャンプリーダー 江原 文香

2、FIWC とは

Friends International Work Camp



FIWC 九州は九州(主に福岡)の大学生が主体となり、学生のみで国内外で国際協力を行っている学生 NGO 団体です。

< 国際活動 >

○中国キャンプ

ハンセン病快復村へ行き、村人のケアやインフラ整備を中国の大学生と行う。

○フィリピンキャンプ

フィリピンレイテ島の貧困村を訪れ、インフラ整備を村人と共に行いながら交流を図る。

< 国内活動 >

○耶馬溪キャンプ

年3回大分県の耶馬溪で農業体験を行っている。

○FP (FIWC Party)

月1回程度、博多の「びおとーぷ」で行っている勉強会&交流会。

○その他

学祭、まんぱ(Monthly Party)、総会、国内合宿 など

他にも自由な発想で自由な活動を行っている柔軟さが FIWC 九州の特徴です。また、FIWC は九州の他、関東、関西、東海、広島に支部があり、互いに情報交換を行いながらそれぞれが自立した活動を行っています。

☆キャンパーだけでなく、国内活動も一緒に参加してくれる大学生を募集中！！

3、重要人物紹介



ロクロクさん（現地エンジニア）

1999年からFIWC 関東のキャンプに参加して下さっている現地のエンジニア。FIWC 九州発足後は九州のプロジェクトのみに関わらずキャンプを様々な面から支えて下さっています。今回のキャンプでも毎日朝早くから、体調が悪いときでもメンバーからもらったサロンパスや冷えピタを張ってワーク成功のために協力して下さいました。FIWCのメンバーを心から愛してくれている、私たちのお父さんの存在です。

タタイ・ガリオ（ブノイ村長）

今回のキャンプ地であるブノイ村の村長さん。奥さんが亡くなられて現在は息子さんたちと暮らしています。キャンプ中にはよく家にメンバーを招いてくださり、お酒をふるまったりディスコをしたりしました。メンバーが楽しそうなのをいつも嬉しそうに見守っている優しいおじさんです。



ダディ・ドドン

2009年のワーク時にお世話になり、それ以降も私たちの活動に協力して下さる元マタグオブ副市長。ダディ宅に私たちの生活用品を預けさせてもらっています。今回のキャンプ中には訪問した際にスナックやコーラをごちそうになりました。Farewell Partyにも遊びにきてくれました！

NorWeLeDePAI(North Western Leyte Development Parent's Association Inc.)



FIWC九州と2004年から連携体制をとっている現地NGO団体。この団体は、レイテ島北西部の村々で子供たちと両親が中心となってコミュニティーの発展を目指す活動を行っており、World Visionから資金援助を受けている。毎回パスポート等の管理をお願いしているが、今回訪問前の連絡がうまく取れず貴重品を預けることができなかつたため訪問のみを行った。

4、ワーク地・訪問地紹介

ブノイ村 (Bonoy)

今回のワーク地。人口約 700 人の村。マタグオブ市の中心地からバイクで5分ほどで、ハイウェイ沿いに位置している。4つの citio (地区)に分かれており、中には電気が通っていない地区もある。今回のワークではプロパー地区の水道設備の改善を行った。村人はみんな仲良しで、とても私たちに協力的だった。Partyでは日本人に楽しんでもらおうとおいしい料理を提供してくれたりゲームを考えてくれたりとお祭り大好きでにぎやかな村だ。



カンソソ村 (Cansoso)

前回のワーク地。人口約 700 人の村。マタグオブ市の中心地からバイクで10分ほどのところに位置する。前回のワークでは雨天時の通行者の安全のため、川の上にフットブリッジをつくった。今回の訪問時は村人とお酒を飲んでおしゃべりしたり、子供たちと遊んだりして過ごした。



マタグオブ市 (Matag-ob)

ブノイ、カンソソ村が所属する市。フィリピン南東の島、レイテ島の西側に位置する田舎町。オルモックからバスで1時間半ほど離れている。中心にはマーケットなど様々な店が立ち並んでいる。一方で山間部に位置する村は水道や生活環境が整っていないことが多く、周辺の市と比べても貧しい市の一つである。FIWC九州では過去数年この市でプロジェクトを行っている。今では私たちの活動が浸透しつつあり、日本人への理解が深まっている。今回のプロジェクトは市・村・FIWCの共同でのプロジェクトという形であった。



オルモック市 (Ormoc)



レイテ島西部で最も栄えている港町。街中には大きなスーパーマーケット、大きな病院、銀行、郵便局、換金所など、必要なものはすべて揃っている。フェリー乗り場や大きなバスターミナルもある。オルモックからレイテ島の各町へバスが出ている。

セブ (Cebu)

フィリピン中部のビサヤ諸島にあるセブ島。マニラ首都圏に次ぐ大都市圏。キャンプでは隣のマクタン島にあるマクタン・セブ国際空港から出入国し、空港施設内にあるシランガンホテルに宿泊。最終日には SM という大きなデパートで買い物を楽しんだ。



5、活動日程

MTG スケジュール

- 12/2(火) 第一回 MTG @びおとーぶ
- 12/9(火) 第二回 MTG @びおとーぶ
- 12/16(火) 第三回 MTG @びおとーぶ
- 12/22(月) 第四回 MTG @あすみん
- 1/5(月) 第五回 MTG @びおとーぶ
- 1/13(火) 第六回 MTG @びおとーぶ
- 1/31(土) 第七回 MTG @まさえさん家
- 1/31(土), 2/1(日) 国内合宿 @まさえさん家
- 2/13(金)~3/14(土) 本キャンプ
- 3/16(月) 事後 MTG @びおとーぶ
- 4/25(土) キャンプ報告会 @びおとーぶ



キャンプ日程

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
					2/13 福岡発(先発)	2/14 村到着(先発)
2/15 GAM カガワット MTG	2/16 ノルウェル 資材買い出し	2/17 表敬訪問 Police	2/18 ワーク開始	2/19 福岡発(中発)	2/20 ノルウェル 村到着(中発)	2/21 教育①
2/22	2/23	2/24	2/25 福岡発(後発) 後発迎え隊出発	2/26 ノルウェル Police 村到着(後発) Welcome Party	2/27 ノルウェル	2/28 Japanese Festival
3/1	3/2	3/3 ホームステイ MTG	3/4	3/5 ホームステイ 開始	3/6	3/7 教育②
3/8	3/9 ワーク最終日	3/10	3/11 ワーク最終日	3/12 Farewell Party	3/13 村出発	3/14 福岡着

6、ワーク報告

● 概要

場所：フィリピン共和国レイテ島マタグオブ市ブノイ村

内容：Improvement of water system（水道設備の改善）

期間：2月18日～3月9日（土日を除く）

参加者：FIWC九州、村人(20人程度)、カガワット（村役員）、現地エンジニア

● ワーク詳細

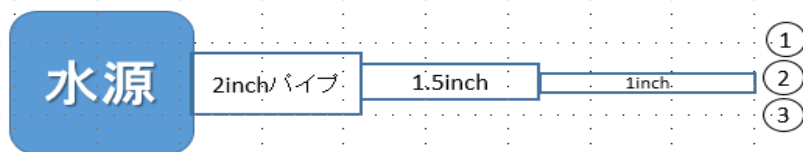
(1) ワーク地詳細

村	ブノイ	人口	698人
問題点	水源は豊富だが水道設備の効率が悪く蛇口からの水圧が弱い。晴れの日が続くと水が出ないこともある。100世帯以上の家庭が3つの公共の蛇口を使用している。毎日何十回も公共の蛇口と家を往復して水を運ばなければいけない。		
場所と交通手段	移動手段は主に車、バイク、徒歩。マーケットからバイクで5分程度。		
備考	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 村は20年以上前からこの水道設備の問題に悩まされている。 ➤ 1度国が600万 p の予算で水道設備の改善をしようとしたが、財政困難により中止になった。 ➤ ワールドビジョンがブノイの4つの集落のうちの1つ（ダタック）の水道設備の改善と井戸の建設を行った。 ➤ ブノイはハイウェイ沿いの村で、土地が低いため雨が降ると洪水になりやすい。 ➤ 4つの集落のうちproper（村の中心の集落）以外は他の水源を使用しているため村の60%ほどの人に利益がある。 		

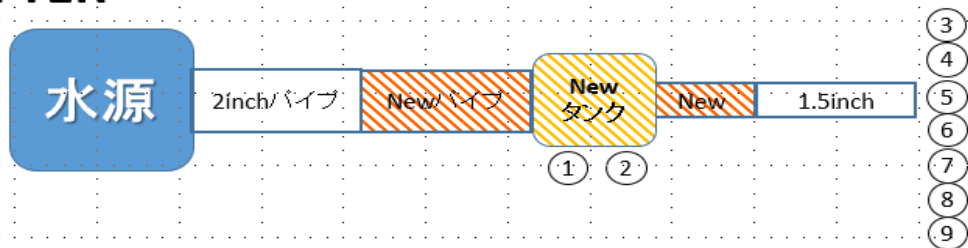
(2) ワーク概要

今回のワークでは、主に新しいタンクの建設とパイプの入れ替え作業を行った。水源はブノイの隣の村、サンマルセリーノにあり、そこからブノイの中心部までパイプを繋いでいた。水圧を改善するために 1.5inch の水道管を 2.0inch に、1.0inch の水道管を 1.5inch にそれぞれ交換した。そして途中に新しいタンクを建設し、ここで一度水を貯めることで水圧の向上を図った。新しいタンクから各蛇口までは 2 本のパイプを接続し、それぞれが 6 個と 3 個の蛇口に水を供給する。水圧の改善とともに、もともと 3 個しかなかった公共の蛇口を 7 個に増やすのと BRGY ホールの蛇口から水を出すことに成功した。また、新しいタンクにはオープンタンクを設置し、蛇口を 2 個設けた。

BEFORE



AFTER



新しいタンク



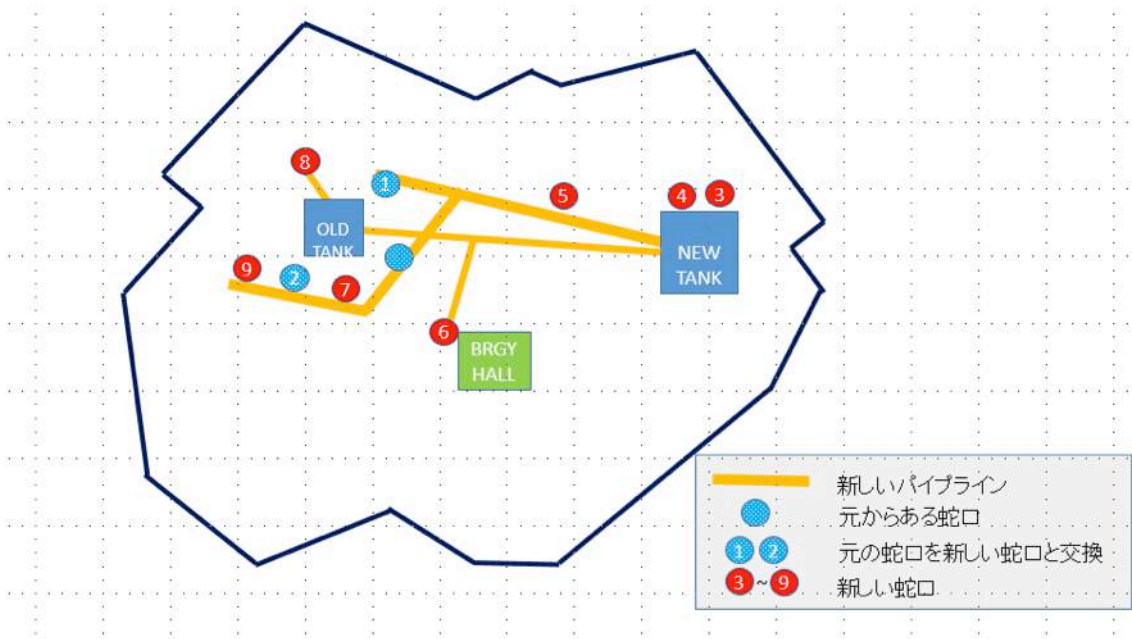
タンクから接続された2本のパイプ



ワーク前の水圧



ワーク後の水圧



新しい蛇口の設置場所

- 1日のスケジュール

8:30~11:30 ワーク 午前の部

11:30~13:30 昼食&休憩

13:30~16:30 ワーク 午後の部

ワークの進行具合やワーク環境などに合わせて開始や終了時刻を前後させた。また、ワーク中にも休憩はとり、体調管理につとめた。

- ワークの手順

1 古いパイプの掘り起こし

パイプを新しいものに入れ替えるため、埋まっている古いパイプを水源からプロパー(村の中心の集落)まで掘り起こしていった。



2 タンク作り

I. タンクの型を木材で作った。型はベニヤ板で形を作った後、木材で固定していった。スチールバー組んだものを板と板の間に配置しセメントの補強を行った。



II. セメントを作った型の中に流し込んだ。セメントを混ぜる際の資材比率は、セメント：砂：小石＝1：2：2で、資材に水を加え混ぜ、みんなでバケツリレーをして型の中に流し込んだ。



III. 型を取り外した後、タンクの上部を建設した。その後タンクの内部と外壁を水で溶いたセメントで整えた。この仕事はお金を払いスキルワーカーさんに頼んだ。また、タンクの裏に周辺の住民が水を使えるようにオープンタンクと蛇口を設置した。



3 パイプの運搬・交換

あらかじめ掘り起こしていた古いパイプをプロパー(村の中心の集落)まで運ぶとともに、新しいパイプをパイプの設置場所に配置し水源からプロパーまで繋げた。



4 蛇口設置作業

カガワット(村役員)たちと話し合いながら、新しい蛇口を設置する場所を決定し、設置した。蛇口の位置を決定する際は、なるべく村全体が公平に水を使えるように配慮した。



5 パイプの埋め込み作業

パイプを設置した場所を掘り、パイプを埋めた。人がよく通る場所や農作業に使用する場所など、優先度の高い場所から掘って埋めていった。



6 モニュメント作り

ワークの記念としてタンクの裏側にモニュメントを作り、キャンパー、ロクロさん、キャンプテーマを刻んだ。また、全員の手形も残した。これを見た村人たちが私たちと過ごした時間を思い出してほしい。



● ワーク費の詳細

今回はレートが低く、予定よりもワーク費に余裕がなかった。到着前からロクロクさんが安い資材を予約してくれていたことや、市から無料の砂を提供してもらったこと、小石をカガワットや村人から提供してもらったことにより予定通り資材をそろえることが出来た。FIWCの予算と村の予算による資材はほとんど全てパロンポンで購入した。

【予算の詳細】

○ワーク全体収支

【収入】		【支出】	
助成金	110058	material	274937.65
寄付金	11631	tool	6311.5
ぬけさん	3000	運搬費	1415
FI計	124689	food for work	32200
		rice	8000
BRGY	95275	bayanihan lunch	30000
Municipal	151000	skill worker saraly	1100
計	370964	感謝料	17000
		計	370964.15

○BRGY (村) ワーク費詳細

1.5 inch P.E. pipe	65,000
steel bar	10,000
bayanihan lunch	20,000
rice	275
計	95,275

○Municipal (市) ワーク費詳細

	単価	数量		
2inch P.E. pipe	10800	11	rolls	118,800
rice(food for work)	2300	14	bags	32,200
			計	151,000

○FIWC ワーク費詳細

	単価	数量		
coco lumber				3,000
gravel	1200	3	cube	3,600
sand	1200	4	cube	4,800
2inch P.E. pipe	7500	6	rolls	45,000
ordinary plywood	300	16		4,400
sahara	34	40	bags	1,360
tie wire	55	10	kg	550
cement	218	50	bags	10,900
rice	2000	4	bags	7,725
bayanihan lunch				10,000
G.I. pipe 1 1/2				1,010
G.I. pipe 1/2				325
ball valve 1 1/2				1,030
G.I. cup 1 1/2				61
G.I. cup 2				41
G.I. I. how 3/4				13
G.I. plug 3/4				11
faucet	240	7		1,680
G.I. nipple 3/4				38
shovel	380	8		3,040
	150	4		600
pick matok	295	3		885
	290	1		290
pipe wrench				590
hummar				160
hack saw				169
hack saw blade	45	3		135
construction pail	38	10		380
tepe loon	12.5	5		63
Delivery				1,000
nail #4	46	8	kg	368
nail #3	48	4	kg	192
nail #2	50	2	kg	100
nail #1 1/2	52	1	kg	52
additional coco lumber				500
chain saw				750
skill worker saraly				1,100
その他部品				1,357
ハバル代				415
感謝料				17,000
			計	124,689

○感謝料

ロクロクさんに今回の協力に対して感謝料を FIWC の予算から支払った。

○米代

今回のキャンプはレイテ島を直撃した台風ヨランダの被害から2年目のキャンプであり、台風の被害がいまだに村人の生活を圧迫している状態だった。そのためボランティアに参加できる余裕がある村人が少ないのと、参加できたとしても金銭的に村人の生活を圧迫してしまう懸念があった。しかし FIWC は資金援助をする団体ではないため、出来るだけお金の援助は避けたいという思いもあり、私達は働きに来てくれた村人達に、現金ではなく米を支給する **food for work** を行うことにした。村人には毎日ワーク後に1日につき **2kg** の米を渡した。量としては、**2kg**×**20人**×**15日分**を目安として計 **14** サック (1 サック=**48kg**) を市の予算から、市がまとめて購入した。1日に働きに来る人の人数は村の役員が1日 **20人** 程度に調節してくれたが、ワークが順調に進んだためワーク日数は予定より1日少なかった。結果としてお米は約 **2** サック余った。このうち1サックはワーク中朝から晩まで中心となって働いてくれたロクロクさんの家族に、1/2 サックは **Farewell Party** で使用し、1/2 サックは **BRGY** 役員と相談した結果、村で最も貧しい家庭に村からの援助として米を渡した。



● 総括

長年 FIWC のワークキャンプを一緒に作ってきた現地エンジニアのロクロクさんが今回のワークを「**The best work we've ever done**」と評価してくれた。今回の **Improvement of water system** は今までの経験上問題が最も起こりやすいとされる **water system**(水道設備)のワークで、プロパー(村の中心部の集落)の水道設備の改善という大規模なワークだった。にも関わらず、天候に恵まれ、資材の到着も大きな遅れをとることなく、多くの村人の助けを得ることができ、問題という問題も起こることなく、予定よりも余裕を持って、無事水道設備の改善全作業を完了させて帰国することが出来た。

Proper の各蛇口の水圧は誰の目にも分かるほど大きく改善され、村の公共の蛇口は元の3個から7個に増加された。私達がワークを行った時期はフィリピンでは乾季(最も水が不足する季節)だったにも関わらず、全ての蛇口から多くの水があふれていたという事実から、今後いずれの季節においても十分な水の供給が出来るということが予測できるだろう。ワーク終了後多くの村人から喜びの声と感謝の声があがった。今まで多くの先輩方が築き上げてきた経験から多くを学び、下見キャンプからの調査、準備、本キャンプでの日々のワークでキャンパー全員が全力を尽くし、村人達の強い思いと多くの協力があってこそこのようなすばらしい結果が得られたのだと思う。皆の思いがこもった、皆の手で作上げたこの大切な **water system** が今後村人の手によって大切に守られ、そしてより発展していくことをキャンパー一同心から願っている。

7、教育活動報告 “学びプロジェクト”

●概要

実施日時：2月21日（土）午前中、3月7日（土）午前中

内容：「Education Project（学びプロジェクト）」

場所：ブノイ村の小学校

参加者：FIWC九州、村の子供たち

●経緯

下見キャンプの際、キャンパーが子供たちが学校をさぼる姿を目撃したり、将来の夢を聞いたときに「教師」「幸せな家庭」など回答が限定されていた。そこで下見キャンパーが話し合い、「子供たちに夢を持ってもらう」「学ぶ楽しさ・大切さに気付いてもらう」「子供の教育の現状が改善されることによる将来的な地域の活性化」を目的として教育プロジェクトを実施する案が出された。これに本キャンメンバー全員が賛成し、FIWC九州としては初の試みとなる教育プロジェクトを実施することに決めた。

●目的

「子供たちに学ぶ楽しさを知ってもらう」

キャンパーで話し合った結果、教育プロジェクトの実施日が2日しかない為、目的を1つに絞ろうということになり柱を「学ぶ楽しさを知ってもらう」「職業を知ってもらう」の2つに絞って議論をした。両者のメリットやデメリットを出し合い、今回はキャンプまでの準備期間が短いことや、やりやすさを踏まえ柱は子供たちに「学ぶ楽しさを知ってもらう」に決定し、勉強への意欲を向上させることが最終目的となった。

●学びプロジェクト詳細

☆1日目 2月21日（土）☆

10:00～10:10 インTRODクシヨソ

メンバーの小中高校生時代の写真を使いながら日本の学校制度を簡単に紹介した。このプロジェクトを通して、勉強が好きではない子には勉強の楽しさに気付いてほしい、勉強が好きな子にはもっと好きになって欲しいということを伝えた。子供たちは静かに真剣に聞いてくれていた。たまたま来て下さっていたぬけさんに、日本語からビサヤ語への通訳に協力していただけてとても助かった。



10:10~11:40 クイズ

割りばしなどの棒で作った数式を、棒を数本動かして違う数式にしたり、300mlのカップと500mlのカップだけを使って400mlを測り取ったりというような、ひらめきが必要なクイズを多く出題した。子供たちにはゲーム感覚で楽しんでもらえたようだった。年長の子が小さな子に教えている様子や、難しい問題にはお互いに考えを出し合って協力して回答を出そうとする様子も見られた。



☆2日目 3月7日(土)☆

10:00~11:00 科学実験(静電気の発生)



家電製品を動かしている電気や雷の電気について知ってもらうために静電気を発生させる実験をした。現地では小学校では電気について習わないし、湿気が多いためか日本の冬のようにパチッと静電気がおこることが少ないため、まず紙芝居とコントで電気の原理を簡単に説明した後、ビニールテープとティッシュ、ストローを子供一人一人に配り、それを使って静電気を体感してもらった。

11:00~11:40 お絵描き

現地ではたくさん色を使って絵を描く機会がなかなかないため、その機会をもってもらおうと思い、「夢」というテーマで絵を描いてもらった。「教師」や「幸せな家庭」などが多かったが、中にはファッションデザイナーになりたいという子もいた。終わったあとにクレヨンや色鉛筆は子供皆に分けてあげた。



11:40~11:50 まとめ

2日間のまとめとして将来のためにたくさん勉強してほしいと伝えた。

●総括

学びプロジェクトは今回が初の試みで、どうなるか予想できなかったが、予想以上に子供たちが楽しんでくれていてとても賑やかに盛り上がった。村中の駄菓子屋さんにもポスターを貼って宣伝したので、小学校から比較的遠い村の端からも子供たちがたくさん参加してくれた。年齢層は小学生が中心で、高校生たちも少数だが参加してくれた。パートで分担して準備をしたが、それぞれがしっかり準備をしてくれたので全体的にスムーズに進んで、日本人も一緒に楽しんですることができた。

実験の後日も子供たちが静電気を起こして「マジック！」と言って見せてきてくれて、学びプロジェクトその場限りではなくて、少なくとも面白いと感じてくれているのだと嬉しく感じた。学びプロジェクトがきっかけとなって少しでも勉強意欲がわいたり、興味を持ったことを追及したりしようと思う子供がいることを願っている。



8、生活状況

衣

フィリピンは雨期と乾季の二つの季節がある。最高気温が 30℃を超える日がほとんどのため、普段はTシャツ、半ズボン、サンダルといったラフな服装で過ごす。ただし、朝晩に冷え込むこともあるので長袖のパーカーなど、羽織るものが必要。ワーク中はケガ防止のために靴を履くことが望ましい。熱中症対策として帽子と日焼け止めは必須。また、日焼け止めに加え、アームカバーやスポーツ用のアンダーウェア、レギンスなどを着用しているキャンパーもいた。たいていの衣類は現地で安く購入できる。



食

フィリピン料理は鶏肉、豚肉、野菜、魚を醤油や塩、味の素などで味付けしたものが中心で、比較的日本人の味覚に合うものが多い。主食は米でおかずが 1、2 品という献立が多かった。大きな皿に料理が盛り付けられ、そこから争奪戦が始まる。お祝い事がある日は豚の丸焼きやヤギがでる。日本人はスプーンとフォークを使って食べていたが、今回村人を真似て、手で食べるのに挑戦したキャンパーもいた。現地人曰く、手の方が、金属の味がせず美味しいらしい。また、バナナやココナッツなど亜熱帯のフルーツも豊富である。前回までは台風の影響でココナッツはほとんど食べられなかったが、今回はかなり復活していて、ワーク中に村人が木に登ってとってきてくれ、その場で食べることもあった。飲み物は食事の時は水、その他にもコーヒー、コーラ、スプライトなども飲んでいて、生水を飲むとお腹を壊す可能性があるため、ミネラルウォーターを飲むようにしていた。



住

キャンプ前半は、BRGY ホールという村の公民館を借りて、キャンパー全員床にゴザを敷いて寝た。後発が来てからホームステイが始まるまでは、スペースの関係上 BRGY ホールで全員寝ることはできなかったの、寝る時だけは隣にある小学校の教室を使わせてもらった。荷物は全て BRGY ホールに置くようにしていた。



【洗濯(ラバ)】

洗濯機がないため全て手洗い。たらいに水を溜め、粉末洗剤で汚れを落とす。キャンパー全員分の洗い物を当番制にして4人で洗った。日本人は手洗いに慣れていないため、とても時間がかかる上に、たいして汚れが落ちない。毎年、ホームステイの期間は各自ホームステイ先でラバを行っていたが、今回は村の水が少ないので迷惑がかからないよう、ワークがない日を除いては、引き続き当番制で洗った。



【風呂(リーゴ)】

現地では水浴びのことを「リーゴ」と言う。これが日本でいう風呂にあたる。湯船やお湯が無いので、バケツやたらいに水を溜めて手桶ですくって水浴びをする。ほとんどの家はリーゴをトイレの中ですが、服を着たままなら外で行うこともできる。体温を奪われて風邪を引くことがあるため、夜やワーク終了後1時間はリーゴを避け、日が暮れるまでに済ませるように心がけた。



【トイレ】

トイレは便座がなく、低くて小さい洋式便所が主流。そのため空気椅子をするか、あきらめて便器に座るか苦渋の選択に迫られる。また、水洗ではあるがレバーがあって自動で流れる訳ではないので、便器の傍にあるポリバケツから手桶で水をすくって流す。この時注意するのが、トイレットペーパーを流さないこと！流した場合はトイレが詰まるので、トイレに行くときは各自ゴミ袋を持っていくことをお忘れなく！



【買い物】

村には「サリサリ」と呼ばれる小さな商店があり、お菓子やジュース、洗剤などちょっとした買い物をすることができる。また、村からバイクで5分ほどのところにマタグオブ市のマーケットがあり、食料品や衣類、薬など生活用品全般を調達することができる。肉や野菜は2日に1回マーケットに買いに行き、それを使ってご飯を作ってもらった。



【交通】

村から周辺の移動は「ハバルハバル」というバイクタクシーを利用する。乗り方によってはドライバー含め5人乗ることができる。オルモックのような離れた場所に行く時は、バスやバンを使って移動した。その他、空港—セブ港間はバンやタクシー、セブ島—レイテ島間は高速フェリーを利用した。また、今回はサイドカー付きのバイクタクシー「トライシクル」という乗り物を一番多く利用した。今回のキャンプ地であるブノイ村はハイウェー沿いの平地にあるため、トライシクルをつかまえやすかった。トライシクルは使える場所に制限があるが、7.8人ほど乗ることができる。



9、各係活動報告

<会計>

(仕事内容) 金銭の徴収・管理、換金、毎日の収支記録

(料金の目安)

宿泊費

・シランガンホテル

(シングルベッド、エアコン付) 850P/部屋、泊

交通費

・船

セブ→オルモック (スーパーキャット) 585P×6

オルモック→セブ (スーパーキャット) 685P×17

・バン

シランガン→セブ港 1000P/台 SM→セブ空港 1000P/台

・モルティカブ

ブノイ⇄オルモック往復 1300P/台 セブ港→SM 250P/台

・ハバル

ブノイ→マーケット 5P/人 ブノイ→カンソソ 20P/人

・トライシクル

ブノイ→マーケット 5P/人

・その他

空港税 750P/人

タクシー SM→セブ空港 300P/台

(レート) 1万→3650P (2015.2.14)

→3550P(2015.3.13)



【おおよその旅費】 (単位：円)

旅費	先発	中発	後発
航空券	67360	66610	54610
保険料	5000	5000	4000
生活費	15000	15000	15000
個人費	10000	10000	10000
キャンプ参加費	1000	1000	1000
合計	98360	97610	84610

【滞在中の収支】

収入 (単位：ペソ)

生活費	92747
繰越金	3368
ワーク費	110058
ぬけさんからの寄付	3000
寄付金から	11695
合計	220868

支出 (ワーク費)

ワーク費	資材	81138
	その他	25452
感謝料	ロクロクさん	17000
給料	スキルワーカー	1100
	合計	124690

支出 (生活費)

宿泊費	シランガン	5200
食費	水	1490
	食費	39140
携帯	ロード	1760
交通費	船	13315
	バン	3900
	ハバル	1200
	トライシクル	523
	モルティカブ	10400
	タクシー	615
T シャツ	服	1760
	プリント代	3875
生活費	雑費	2128
パーティ	Farewell	1763
	合計	87069



※全体の収支

$$220868 - 124690 - 87069 = 9109$$

(単位：ペソ)

(反省)

- ・繰越金を足していなかった。
- ・記帳を溜めていたときがあった。
- ・メンバーのうちの二人が食材別に相場表をつくってくれたため、マーケットに行く際の値段交渉に役だった。
- ・キャンプ中は収支計算があった。

<イベント>

○Welcome Party [2/26(木)@BRGY ホール]

後発がブノイ村に到着した日の夜に、村人が歓迎の意味を込めて Welcome Party を開いてくれた。ステージ上でキャンパーがそれぞれ自己紹介をした後、持参した「ようかい体操第一」の CD を用いてダンスを披露した。その後は音楽に合わせて村人と夜遅くまでダンスをした。

・ 反省

◎ 今回は例年に比べ先発～後発の到着日の間が長く、後発到着のずいぶん前から日本のダンス（ようかい体操第一）を村人に少し教えていたため、とても興味を持って盛り上がりしてくれた。

× 多少練習不足の人がいた。



○Japanese Festival [2/28(土)@BRGY ホール]

・ タイムスケジュール

10:00～11:30 日本語教室

11:30～13:30 昼休み（スナックタイム）

13:30～15:30 運動会（準備体操・大縄・応援合戦・リレー）

・ 全体の様子

村人との交流と日本文化を伝えるという目的のもと、日本語教室と運動会（準備体操・大縄・応援合戦・リレー）を事前の宣伝のもと行った。また日本語教室の際に同時進行でジャパニーズスナック（白玉）を作り、昼休みの際に村人に配った。全体としては 100 人程の村人が集まってくれた。

▽日本語教室

簡単な日常生活で使う単語（おはよう・暑いなど）を日本語・ローマ字・ビサヤ語で書いたスケッチブックを4セット事前に用意し、それを見せながら村人に教えた。村人には鉛筆と紙を配布して単語書いてもらいまたその単語を復唱して覚えてもらった。またその後、4つのグループに分かれてそれぞれ列になってもらい、先頭の4人にその単語に関する簡単なクイズを行った（1問終了ごとにその4人は後ろに行ってもらいつつ）。終了後その鉛筆と紙は村人に持ち帰ってもらった。

- ・ 使用したもの

スケッチブック4冊、ルーズリーフ、鉛筆

- ・ 反省

× 当初予定していた時間より1時間程早く終わってしまい、日本語教室直後に配る予定だった白玉の完成が昼休み終了直前になってしまった。またそれにより日本人の昼食の時間がほとんど取れなかった。

◎ 村人は熱心に日本語を覚えようとしてくれ、またイベント終了後もその日本語を言ってくれたり、もっと日本語教えてと言ってくる村人もいた。



▽ジャパニーズスナック

今回は白玉をチョコ味ときな粉味の2種類作り、村人にふるまった。調理場は前日にカガワット（村の役員）にお願いしBRGYホールのキッチンを使わせてもらった。

- ・ 材料、使用したもの

白玉粉（白玉400個分）、水（現地購入）、砂糖（現地購入）、きな粉2袋、チョコソース1本、爪楊枝

・ 反省

◎ 味はどうか村人に聞くと美味しいと言ってくれた。ただチョコソースのかかった白玉の方が明らかに人気だった。

× 400個の白玉を作るのは案外時間がかかったため、もう少し早めに調理を開始するべきだった。

× 白玉を盛りつける紙皿も持参していたが、結局 BRGY ホールにある皿を使ったため紙皿は必要なかった。



▽運動会

例年とは少し異なる試みとして、午後は運動会という形でいろんな種目をチーム対抗で行いその順位を競った。チームは村人と日本人を赤・青・黄・白の4つに分け、また区別しやすくかつ士気を上げてもらうために、それぞれ自分の色のビニールテープを腕などに巻いて運動会っぽくした。

△ 準備体操

準備体操として Welcome Party でも披露した「ようかい体操第一」をみんなで踊った。これでみんなのテンションも上がったので良かった。



△ 大縄

第一種目・大縄では、各チーム3分間で何回跳べるかというのを2度行いその合計を競った。1チームの人数が多かったなのでその2回の中で異なるメンバーでもしてもらった。

・ 反省

× 2回の中で異なるメンバーに跳んでもらうようにはしたものの、それでも1チームの人数が多すぎて大縄が出来ない子供がいる状況になってしまい悲しい思いをさせてしまった。

× 進行が上手くいかなかったのでチーム交代がスムーズにいかず、開始に少し時間がかかってしまった。

◎ みんな大縄している人たちに注目して回数を数えてくれて盛り上がった。

◎ イベント終了後も村の子供たちが大縄で使った縄跳びを使って遊んでいた。



△ 応援合戦

第二種目・応援合戦では、各チーム「○○（自分のチームの色）NO.1!!!」などの掛け声のもと、その声量をトーナメント形式で競った。またその判定はカガワットにお願いしてもらった。

・ 反省

◎ ルールのにとっても分かりやすかったので村人はすぐに理解し盛り上がってくれた。

× 少し各チームの平均年齢に差があったので声量にも差が出てしまう結果となった。



△ リレー

最終種目・リレーでは、バスケットコート縦半分の往復の距離をリレー形式で走ってもらい、その速さを競った。片側に各チームの団長が立って、村人（ランナー）はその団長にタッチして戻ってくるルールにした。男女または年齢で走る速さに差が出てしまうので、平等にするために10歳以上の男の子には片足ケンケンで走ってもらった。

・ 反省

◎ 人数調整には手こずったものの、こちらもルールとしては分かりやすかったので、理解してくれて楽しんでくれた。

× こちらも人数調整の際に走ることが出来ない村人が発生し、少し悲しい思いをさせてしまった。

× これはしょうがないかもしれないが、コンクリートのバスケットコートで、かつサンダルでのかけっこは少し危険だったかなと思った。



●Japanese Festival 全体の反省

× 司会進行をする上で台本を作っていなかったのが、グダグダする場面が多々あった。必ずしも作る必要はないかもしれないが、説明する上で用いそうな重要な単語や文章などは予め調べておくべきだと思った。

× 宣伝は前もってしたもの、思ったより参加者（特に大人）が少ない印象で、その要因の一つとしてブノイガマイなどの離れた集落への宣伝を忘れてしまっていたことが挙げられた。

× 暑さを考慮していなかった。ただ村の人たちがテントを張って日陰を作り対処してくれたので助かった。

◎ 結果的には村人・日本人ともに楽しんでくれたので有意義な時間となった。



○Farewell Party(3/12(木)@BRGY ホール)

キャンプの最終日にお別れの意味を込めて Farewell Party を開いた。豚の丸焼きなどのご馳走が用意してくれ、我々は村人に日本食としてカレーライスを食べた（カレーの固形ルーのみ日本から持参し、具などは現地で調達した）。食事の後にはムニシパル（市）から我々一人一人に、ワークに対しての感謝として賞状とともに表彰してもらった。その後日本人一人ずつスピーチをした後また「ようかい体操第一」を披露した。一段落するとその後は村人と踊ったりおしゃべりをしたりと朝まで村人と一緒に楽しい時間を過ごしながら別れを惜しんだ。



○Japanese Party

後発隊が村に着きキャンパーが全員揃った後、日本でのミーティング以外でのキャンパー同士の交流が少なかったので、「日本人だけでおしゃべりしよう！」というミニイベントを企画した。みんなでお酒などの飲み物やお菓子をもち寄り、その日のミーティング後に輪になってメンバー皆でいろんなことを語り合った。これによりキャンパー同士の仲をより深めることができた。



<保健>

【仕事内容】

- ・保健バッグの携帯、管理
- ・メンバーへの声掛け
- ・ワーク時の水、ポカリの準備



【保健バッグ渡航前中身一覧】

保健バッグ渡航前中身一覧			
サバイバルシート	5枚	赤玉	5回分
粉末ポカリ	23袋	バンテリン	5本
冷えピタ	22枚	テーピング	十分量
ガーゼ	1枚	絆創膏 小	12枚
ムヒ	3本	絆創膏 中	117枚
包帯	2本	絆創膏 大	13枚
消毒液	4本	絆創膏 扁平	4枚
頭痛薬	56錠	マスク	十分量
正露丸	1/2瓶	爪切り	2個
ヘパリーゼ	20錠	ピンセット	1個
ザ・ガード	十分量	虫除けスプレー	1個
便秘薬	46錠	はさみ	1個

【反省】

- ×フィリピンで買った体温計が当てにならず、個人の体温計を使った。
→次回のキャンプまで日本製の体温計を買う。
- ×ワークで二手に分かれる時、片方しか保健バッグを持って行けなかった。
→どちらにも少しずつでいいので薬を持っていくべきだった。
- ワーク前に水の用意を時間がある人がやってくれて助かった。

【総括】

今回大病をしたキャンパーはおらず、全員健康の状態での帰国できて良かった。キャンパーの一人が足を化膿したので市のクリニックへ行き診察を受け薬をもらった。他にも切り傷、腹痛、頭痛、便秘、下痢、発熱など、慣れない環境や、毎日のワークでの疲労で体調を崩すキャンパーがいたが、持参していた薬や休息で大事には至らなかった。炎天下の中でワークを行うので誰でもケガや、体調不良を起こす可能性がある。そのため周りに目を配り、休みやすというような環境を作ることが大切だと感じた。



<ホームステイ>

[主な仕事内容]

- GAM でホームステイについて説明
(先発に行ってもらった)
- ホームステイする家の調査
- キャンパーのホームステイ先の決定
- ホームステイ MTG
(ホームステイファミリーに注意事項について説明し、サインしてもらう)



[ペア決定までの流れ]

1. 候補の家をあげてもらおう
GAM 後にホームステイの概要を説明し、ホームステイ可能な家庭をあげてもらおう。今回のキャンプは17人であり、カガワットたちからは、9家庭をあげてもらった。
2. ホームステイ先の調査
家族構成、英語を話せるか、トイレ、ペットの有無、等を実際に家に訪ねて調査した。
3. 希望調査
ホームステイ先の家庭の詳細をキャンパーに説明し、第三希望までのホームステイ先と要望(苦手な人、男女ペアは大丈夫か、心配事等)を紙に書いて提出してもらった。
4. ペア決定
希望調査を元にホームステイ係でペアとホームステイ先を決定した。

[反省]

ホームステイ先の変更が重なり多くのカガワット、村人、キャンパーに迷惑をかけた。(最初プロパーに7軒、ガマイブノイ1軒、ダタックに1軒のホームステイ先をあげてもらっていたが、ダタックの家は電気がつかないということで他の家に引き受けてもらうことになった。最初に一人の予定であった家庭を二人にしたことと、ダタックの家へのホームステイがなくなったことで日本人キャンパーのために準備をしてくれていたその家族に迷惑をかけた。)最初にホームステイすると伝えた家庭はそのために準備をしてくれているので、できるだけ変更はないようにするべきであった。ブノイガマイの家庭は村の中心部からは離れていたため、MTG やワークで大変ただけでなく、村人にも心配をかけてしまった。

◎ホームステイのペア◎

- 1 あや・ゆうか
- 2 さとる・なつ
- 3 あやか・ともや
- 4 あいな・りりこ
- 5 ごゆい・らん
- 6 ぐっさん・なつき
- 7 せいじゅ・みさき
- 8 かな・のり・くるみ



<KP(Kitchen Police)>

[仕事内容]

キャンパーが心地よく生活できるようサポートする。

- 1、洗濯(ラバ)、皿洗いのシフト作成
- 2、生活用品(桶・ハンガーなど)の管理
- 3、水(飲料水・トイレの水)の管理

1 洗濯(ラバ)、皿洗いのシフト作成

出発前に、ラバ・皿洗いのシフト表を作成した。1日につき皿洗い 2 人ラバ4人(先発だけの期間はラバ3人)シフトを作成する際に、ワークリーダーはワークの為、平日にはシフトを入れない、メンバー同士の交流の場となるように、いろんな人とシフトが被ること、全員がほぼ同じ回数シフトに入ることを考慮した。



(反省)

臨機応変にシフト変更ができたが、全員のシフト回数を同じに設定していたため後発は先発に比べ、滞在期間中のラバの割合が多くなった。→先発はワークの疲れもたまってくるし、後発もワークをしたいだろうから、シフトに入る回数は滞在期間に対する割合で決めた方がよいと思った。



2 生活用品(桶・ハンガーなど)の管理

キャンパーにはトイレットペーパー 2 ロールを絶対に持ってくるよう国内で呼びかけを行った。現地では生活用品の管理を行い、每晚個数の確認を行った。

	たらい	食器用 洗剤	洗濯用 洗剤	トイレ用 ブラシ	手桶	ござ	ハンガー
到着直後	2つ	×	×	×	2個	4枚	12本
購入数	1つ	1つ	2袋	×	×	2枚	18本
帰国前	3つ	×	×	×	1つ	6枚	29本+1つ (後者は吊るすタイプ)

(反省)

生活用品の管理はしっかりできていた。古いハンガーを1本折ってしまったが仕方ない。現地の共用の手桶をキャンパーが壊してしまったため、FIの手桶を1つ寄付した。
→物はいつか壊れるが大事に使いましょう。

3 水(飲料水・トイレの水)の管理



飲料水は、1Lのペットボトルのミネラルウォーターを購入した。大きなタンクにミネラルウォーターを貯めておき、それをペットボトルに移して飲んでいった。タンクのミネラルウォーターはマーケットで補充していた。今回滞在したブノイ村の BRGY ホールにはサーバーがあり、cool hot と両方のミネラルウォーターを飲むことが出来た。現地の生水を飲むと日本人は体調を崩す可能性があるためミネラルウォーターを購入して生活していた。

トイレの水については、蛇口が付いており基本的に汲みかえる必要がなかった。ただし現地のトイレは水洗ではなく手桶を用いて自分で流さないといけないため、トイレに蛇口のない所では適宜水を汲んでおく必要がある。

(反省)

BRGY ホール内に水のサーバーがあったこともあり、村人も同じミネラルウォーターを飲んでいたので、村もミネラルウォーターを購入してくれており、FIWC と村が気づいたときにミネラルウォーターを購入していた。トイレの水について、水の出が悪いときに率先してトイレの水を汲みに行けた。→ミネラルウォーターの購入について村と話し合ってもよかったのかもしれない。



1 1、他己紹介

<あやか>

あやかは、パトリックのママで、しっかりしてて、しかも話がまとまっててわかりやすく、ミーティングの時からさすが九大～！て思った！笑

ワークでも、病気がきつくてワークできる状態じゃないのにワークがしたいって言って頑張っ出て来てて、すごい根性持った頑張り屋だと思ったよ。リーダーでみんなをまとめてくれたおかげで楽しいキャンプができました！ありがとう (≧▽≦) ♡ From あや



<ごゆい>

我らがワークリーダーごゆい！ごっさむ！！ごりある！！身長も女子力も高いごゆいはワークリーダーとし友也と一緒にワーク成功へ皆を導いてくれました。ごゆいの頑張りのお蔭でワークが成功したと断言できます！本当にすごいんです！そしてワークと同じくらいダイエットも頑張ってたね！結果は…うん。無表情の時は怖いけど、忙しい中、元気いっぱい子供達と全力で遊び、誰よりもキャンプを楽しむごゆいのことが大好きです。

From みさき

<なつ>

そう！FI のフィリピーナといえば彼女！フィリピン人としても全く違和感のない、もはや馴染みすぎているなつ。笑顔がと～っても素敵で子供たちにも大人気 (^o^) 多くの村人達の心を射止めていました。ちなみに、なつは市長の大のお気に入りとか・・・。さすがです。笑そんななつは、実はと～っても真面目でとってもしっかり者！ワーク中は誰よりも静かに黙々と働いていました。本当に頼りになる存在です！あ、あとなつのミステリアスな雰囲気が好きだあ～！♡以上。サラマーン！

From らん





<りりこ>

いつも元気なキャンパーのムードメーカー、チビで中学生くらいにしか見えないけど下見キャンパーでとっても頼りになる副リーダーです！沢山のご飯を幸せそうに食べる姿を見ているとこっちまで幸せになります。何度かホボックになってご迷惑をおかけしました。何も考えてないように見えてちゃんとみんなのことを考えているりりこは優しいなと思います。キャンプ誘ってくれてありがとう、これからもよろしく！

From ともや

<ともや>

お酒に弱いワーク副リーダーともや！！ホボックともや！！（笑）後発と一緒にフィリピンに来るまでは、落ち着いている印象だったけど、（笑）お酒を飲んだともやテンションが変わって、顔を真っ赤にしているからすぐにホボックになってることがバレバレでした(´▽`)

でもワーク副リーダーとしていろいろとワークリーダーと一緒に頑張ってたね！本当にお疲れ様！！頑張り過ぎて熱出さないようにね…（笑）

From なつき



<あいな>

しっかり者のあいな！あいなは周りの人のことを良く見ていて、ワーク中やラバの時は率先して周りの人を引っ張ってくれました！ココランバーを運ぶときは誰よりも早くて、現地の人もびっくりするくらいの頑張り屋さん！同じ先発組だったから、現地では恋愛の話をしたり一緒に子どもたちと遊んだり、、、思い出が尽きないね♪あいなと一緒にフィリピン行けて楽しかったよ～！！ありがとう！

From ゆうか

<のり>

日焼け止めと虫除けを塗らずに、虫刺されと日焼けで肌がとんでもないことになってたり、最初は異常に恐れていたオカマ達と最後には仲良くなったり、最終日には声変わりしてたり、のりの行動には謎が多いです（笑）あと美脚です。のりは急に面白いことを言って笑わせてくれます。個人的にすごいツボです。教育の時のなつきとのコントはすごい面白かった！下見からのりと一緒にキャンプできてよかったよ！笑いをありがとう(^O^)/

From なつ



<みさき>

キャンプ5回目の経験からでるミーティングやGAMでの的確な発言、村人やメンバーへの気遣いはさすがすぎました。自分のなかではスーパーミーたんです。しかし褒め方がへたい彼女はメンバーを褒めても悪意しか感じません。保健係としてメンバーの体調を気遣ったり、気遣わなかったりもします(笑)でもキャンプについてワークについてだれよりも知っていて、いろんな面から物事を見ることができて、キャンプを陰で支えていました。その姿は超かっこよかったです。ミーたんから学んだことはとても多かったです。ありがとうございます! From さとる



<さとる>

さとる! saturo!先発男の子ひとりで最初元気なくて心配しました。けど気色の悪いクネクネしたダンスを踊り始めたあたりから大丈夫だと確信しました。会計の仕事も真面目にこなして、優しいからいろんなこと気にかけてくれてたね。頭のねじが一本とれて、すぐにホボックなって号泣して、スワンになってみんなを笑わせてくれる悟のことみんな大好きです。キャンプ誘ってよかったわ! つっこんであげるけん、まだまだボケ続けてね(^ ^)



From りりこ

<ゆうか>

陽気さ no.1!ショーパン×シャツインがトレードマーク!!持ち前の明るさとコミュニケーション力で、ゆうかはいつも村人の輪の中心にいたように思います(^^)ワークではたくさんの青年たちを引き連れて作業を盛り上げてくれていたね!!何事にも前向きに、楽しそうに作業を行っていた!そんなゆうかの笑顔と明るい声がみんなに元気をくれました!ゆうかを見ると晴れやかな気持ちになったよ!キャンプ終盤は声ガラガラになってたね…(笑)洋楽をかっこよく歌いこなすゆうかも素敵でした☆☆!ありがとうございます!



From かな

<せーじゅ>

前カンソソキャンプのリーダーであり、フィリキャン4回目という頼れるお兄さんのせーちゃん。本当に優しく、陰からメンバーのフォローをするせーちゃんは皆の精神的支柱だったよ。せーちゃんがいたから、皆安心して生活出来たんじゃないかな。子供たちのハートをつかむ感じはさすがでした。ただ、ホボック工藤の時はちょっと面倒くさかったけど…普段とのGAPが最高です。これまでフィリキャンお疲れさま。そしてありがとう。

From あいな





<ぐっさん>

行った初日にバレーボールでぎっくり腰になっちゃぐっさん！キャンプ中終始皆に笑いを届けてくれました。フィリピンを知り尽くし、あらゆる手を使ってフィリピン人の人気をあっさりって行くぐっさんが羨ましかったー^^どんな時でもエンターテイメント性を一番に考え、幼女を追いかけ、平和主義を貫くぐっさんはとてもかっこ良かった！ぐっさんがキャンプに来てくれたおかげでこんなに楽しいキャンプになったと思う！ありがとう♪

From ごゆい

<くるみ>

くるみはなんか全体的にふわふわしてたね。そのふわふわは時に青年を浮かせ、時にぶっとんだ発言を生んだね。あと、すごいご飯食べてたね。感動した。でも誤解しないで。これはどれも良い意味でなんです。いつも周りの空気を和ませてくれるくるみの姿はみんなの癒しでした。うん、ほんとに。個人的にはキャンプ中終始山口の恋愛事情に巻き込まれてくれてありがとう。とても助かりました。笑 あ、ホームステイ係お疲れさん。

From ぐっさん



<かな>

かなといえば passport 。もともと先発の予定で準備万端で空港に行ったのに、passport の期限が足りず1人だけ空港に置いて行かれた(笑)。その足で家に帰るのは辛かったでしょう。でも結局ブノイ行けたから良かったね。そんなかなはいつも笑顔！その笑顔に誰もがワークの疲れを癒されました。どんなボケでも笑ってくれる優しさがあります。ツボが浅いだけかな(かなだけに)?うん。でもまあ、いくらツボ浅くても passport の件は笑えんけど。笑

From せーじゅ

<らん>

フィリピーナらん姉ちゃん\(^o^)/抜群の英語力でたくさん助けてもらったね！らん姉ちゃんのコミュニケーションの高さには本当に驚きました。そしてまじでフィリピン人と区別がつかない(笑)好奇心旺盛すぎてちょっとヒヤヒヤしてたけど、でも思いっきりフィリピンを満喫してたようで嬉しかったです^^ 周りを明るくするらん姉ちゃんの笑顔と元気が大好きだよ♡キャンプお疲れさまでした～！

From あやか





<なつき>

祈答院は大事なところできちんとみんなを笑わせてくれました！（笑）フィリピンで生活してるとは思えないくらい白くてご飯の時に黒い人にはさまれてオセロでした(*^-^*) イベントでの、hello everybody は忘れません^^ なつきは全体的にさっぱりとしてるけど頼りになってお姉さんて感じでした。お疲れ様でした!(^^)!

From くるみ

<あや>

我らがバービー!! 人見知りしない性格と独特の思考回路で空気を和ませるバービー!! 元ヤン(?)ならではのイケイケの雰囲気を持ち、よく北九州を語るバービー!! フィリピンでは老若男女の心をわしづかみで大人気やったバービー!! ジェイマールのダンスのパートナーバービー!! そしてワークの時はよくサボっ...村人と交流を深めていたバービー!! キャンプ後半は精神的にたくましくなっとったバービー!! おつかれバービー!!

From のり



1 1、感想

○あやか

3月4日の夕方。空には満月が浮かんでいた。村にはたくさんの笑顔と涙。この日見た光景と抱いた感情は一生忘れない、それくらい私にとって経験したことのない大きな感動と充実感を与えた日だった。そう、この日は初めて村人と共に作った水道システムから村へ水が届いた日。なかなか出てこない水に不安と焦りを抱えながら、パイプの出口でロクロクさんや村人達とじっと待った。そして、勢いよく水が出たのを目にした瞬間、みんなを抱き合っ泣いて喜んだ。その後1つ1つの蛇口を歩いて回り、水が出るのを確認していった。どの蛇口にも村人が集まり、こぞって水を汲んでいた。そんな村人1人1人と握手しハグをした。みんなとびきりの笑顔と共に感謝の言葉を伝えてくれた。たくさん伝えたいことはあったけど、その時の私には感情を上手く言葉にする余裕もなく、“salamat(ありがとう)”の一言を返すのが精一杯だった。

学生の私たちになにができるのか？資金も時間も技術力も乏しい私たちにできることなんてたかが知れている。だからこそ、「私たちにしかできないこと」をやり抜く。それが今回のキャンプを通しての私のポリシーだった。私たちの1番の特徴、それは小規模な学生団体であるということ。同じ目線に立って生活するからこそ感じられるものもある。プロジェクト遂行中、パイプの取り替えのため日中水道が使えない日が数日あった。遠くの井戸まで水を汲みに行き重たい水を抱える度、私たちのプロジェクトの重大さが改めて身に染みたと同時に、何としてもプロジェクトを成功させなければいけないと思った。一方的な自分本意の支援ではなく、村に溶け込み村人と同じ目線で彼らの思いを感じ考え、村人と共に作り上げるプロジェクトが可能なのは、お偉いさんやお金持ちではなくこんな私たちだからだと思う。そして私が思う「私たちにしかできないこと」、その究極の形は「村人たちとバカ騒ぎすること」だと村での滞在を通して改めて感じた。村人たちと踊って歌ってふざけあってお酒を飲んで、ほんとバカみたいって自分でも思うけど、そこから生まれる笑顔と絆はどんな団体のプロジェクトにも負けない価値があると私は自信を持って言える。

天気、バヤニハン(ボランティア)の頑張り、その他村人たちの多大な協力、村や市のサポート等、たくさんの幸運と優しさに恵まれ無事に期間中に蛇口まで水が届いた。みんな成功だ！ってすごく喜んでいたり、私も素直に嬉しかった。でも今回プロジェクトが成功したか否かは、今はまだ図れないと私は思っている。私たちの1番の目的は「村の自立的な活性化の促進」であり、この結果こそ私たちが望んでいるものである。私たちが村に入り込み共同生活・共同労働を行ったことで、村人たちの意識に少しでも刺激を与え、今度は村人たち自身でもっと村をよくしよう！元気にしよう！と思ってくれていたら嬉しい。そして、いつか村に帰って、そのフィードバックを感じる事ができた時、初めて真の成功なのではないかと思っている。

皆さんは1日に何度心から笑っていますか？私は「笑顔」が大好きだ。日本人は勉強や

仕事等いつも様々なことに追われ、笑うことを忘れてるように思う。街中は常にせわしく歩いていく人ばかりで、笑っている人なんてほとんどいない。フィリピンに帰る度に、私は村人たちの笑顔の力に圧倒される。彼らはいつも笑っている。嬉しくても楽しくても、そして悲しいことがあっても笑っている。キャンプ中には、正直つらいこともたくさんあった。でもそんな時、いつも村人たちが私の傍にいてくれた。子供たちの純粋なキラキラした笑顔を見ていると、さっきまであんなに頑張っても笑えなかったのに自然と笑顔になれた。青年たちはいつも傍で元気づけてくれたし、タタイ(お父さん)ナナイ(お母さん)たちもいつでもどこでも私たちの存在を快く迎え入れ支えてくれた。みんなでたわいもない話をしながら笑いあうことが、私にとってどれだけ幸せな時間だったことか。私にとっては村人1人1人が大切な仲間であり家族なのである。日本に帰ってからも彼らの存在が私の支えであることは変わらない。チャットや電話で彼らの頑張りや夢を聞いていると、私も頑張ろうと思うことができる。私にとって彼らは、そんな存在である。

今回のキャンプに関わって下さった多くの方々、この場を借りてお礼申し上げます。そしてキャンパーのみんな、こんなところでは書ききれないくらいたくさんの「ありがとう」を伝えたいです。このキャンプは私の集大成。たくさんの素敵な出会いに恵まれたキャンプだった。私にとってのフィリピンはまさに **another sky**。第2の故郷である。大好きな彼らにまた笑顔で会える日ように、**good-bye** ではなく **see you again**。いつかまた、村に帰って彼らみんなと思いきりバカ騒ぎしたいな。



○ごゆい

9月の下見キャンプから半年、いよいよ本キャンプが始まる！という時私は試験勉強に追われていた。フィリピンに到着したのはキャンプ開始1週間後、ワークに最初から参加できていない事が気が気でなかった。ブノイに到着したとき、先発が大喜びして歓迎してくれた。よし、頑張ろう。ワークリーダーとして確実にワークを成功させよう。そう意気込み、ワークを始めた。が、1週間の遅れは大きかった。なかなかワークの全容をつかめない。今何をしているのか、何が問題でどうすればいいのか、誰に何を聞けばいいのかさっぱり分からない。村人に積極的に話しかけに行く勇氣さえ自分にはなくて、焦りが募った。周りの期待が、信頼があるのが分かっていたから、それを裏切りたくなかった。しっかりして、頼れるリーダーでないと、いつも笑顔で元気でワークを引っ張らないと！ずっとそ



う自分に言い聞かせた。何度も泣きたくなった、でも笑って誤魔化した。1週間経ってやっとワークの全容をしっかりと把握できるようになった。ワークはとても順調だった、問題が多いはずの **water system** のワークだったがほとんど問題は起こらなかった。バヤニハン（ボランティア）の人数不足で困ることはなかったし、資材の到着も大幅な遅れはなく、天候にもめぐまれていた。そ

れでも私の心のうちでは常に不安があった。ワーク中何度もパイプの接続部が外れたり、水が止まることがあった。その度に、もしワークが失敗したらと思い、怖かった。プロパーに水が届いた日、水圧の改善を村人皆が実感した日、感動はしたがまだ安心は出来なかった。この水がいつ止まるか分からなかったから。当初の予定より2日早いワーク最終日、山の水源からプロパーの蛇口まで全てのパイプを埋め終わったその瞬間、思わず目から涙が溢れ出た。「終わったんだ。ワークは成功したんだ。」ワークの成功が私の一番の目標で、私達の果たさなければいけない責任だったから、本当に本当に本当に嬉しかった。

本キャンプを終えて振り返ってみると、あやかも、なつも、みさきも、りりこも、のりも、ともやも、あいなも、ゆうかも、さとりも、くるみも、かなも、らんも、あやも、なつきも、せいじゅも、ぐっさんも、私も、皆完璧じゃなかった。ダメなどこいっぱいあった。だから、それぞれがそれぞれを補い合って、それぞれがそれぞれの場所で、それぞれの良さを出してて、そうやって、こんなに悩んで笑えて最高に最高のキャンプが出来たんだって。当たり前なことだけど、完璧な人間なんていない。誰も自分に完璧なんて求めてないし、だからなんでもかんでも全部一人でやる必要なんてなくて、でも、きっと必死で自分の出来ることを、自分にしか出来ない事を探さないといけないんだろうなって。日々の大学生活みたいに、自分の出来ることも探さずにただボーっと待ってても何にも変わらないし、何にも得られないけど、フィリピンにいると自然と皆が自分の出来ること探してやってる。だからみーんなキラキラ輝いてる！！

最後に、ブノイを、**water system** の改善のワークを選んで本当に良かった。このブノイキャンプでワークリーダーが出来て、本当に良かった。18人全員で最後までキャンプが出来て、本当に良かった。最高の！！キャンプだった！！キャンパーの皆本当にありがとう。ここまで応援してくださった OB、OG の方々、キャンプの参加を許してくれた両親、そしてずっとずっと私達キャンパーのお父さんとして私達を見守ってくれて、ワークを成功へと導いてくれたロクロクさん、ありがとうございました。これからもブノイの村人の幸せと、フィリピンキャンプの今後の更なる発展を願っています。

○なつ

二回目のフィリピンキャンプ。私は下見キャンプ中に現地の病院に入院したので、いろんな人に「前回入院したのに、よくまた行くね」と言われた。でも私にとって今回のキャンプは前回入院したときに受けた沢山の恩を返すためのキャンプだった。

私の両親は今まで私のやることに口を出してきたことはないのに、下見キャンプの時から私がフィリピンに行くことにだけは猛反対だった。「なぜ行かなければならないのか」「自己満足だ」「偽善だ」「ボランティアをする前に自分のことを考えろ」。そう言う両親の娘を心配する気持ちは痛いほどわかっていた。出発当時、テレビでは連日イスラム国のニュースが流れていたり、そんな危険な状況の中で日本から出てほしくなかったのだ。恩返しをしたいと説得をしたけど、ボランティア活動などを一切したことがない彼らに、どれだけ私が説明したってわかってもらえなかった。結局、反対を押し切ったの出発となった。

今回のキャンプでは目標が二つあった。一つ目は教育プロジェクトを成功させること。リーダーなんか向いてないことは分かっていたけど、教育のリーダーをやることにした。日本での話し合いの段階から色々なことを考えた。学校に行って進学して、いいところに就職して、裕福になって、最終的にはフィリピン経済も発展することがいいこと。この考え自体が先進国の日本人の考え方なのかもしれない。文化も考え方も価値観も違うフィリピン人に私たちの考えを押し付けることになるのかもしれない。でも、何か興味を持ったことを追及して、知識を得る喜びはきっと誰にも共通のことだから、その喜びを子供たちに知ってもらいたいと思った。私たちのような学生団体には小学校建設や、教師の育成はできない。ほんの数時間程度の中で、何か少しでもいいから学ぶことが楽しいと思えるきっかけを与えられたらと思った。当日は子供たちに楽しんでもらえたと思う。盛り上がってそれで終わりでもいいのかと思ったけど、後日子供たちが教育の実験でやった静電気を使って遊んでいて、少なくともあの場で終わりじゃなかったことがとても嬉しかった。何をもちて成功といえるのか分からないし、もっと改善の余地があるとは思いますが、一応失敗はしていないと思う。

二つ目の目標は「恩返し」。Water system の改善は難しいワークだけど、必ず成功させようと多くのキャンパーは思っていただろうし、私も口ではそう言っていた。でも私は今だから言えるが、リーダーやワークリーダーがどれほど努力して話し合いに話し合いを重ねて自分の時間をワークの成功のために費やしていたかを知っていたから、失敗するはずないと思っていた。だからワークのことで頭を使うのは皆に任せて、自分のできることはなんだろうとずっと考えていた。とりあえず一分一秒を無駄にしな



いように、朝は一番に起きて子供たちとバスケットをした。とにかく子供たちに楽しんでもらいたかったから体力の限り子供たちと走り回った。途中から考えるのを忘れて私が一番楽しんでいたように思う。思い返してみるとフィリピンでの私は日本にいる時より、よく笑いよく遊びよく泣いていた。言葉は片言で正直そんなに分からないのに些細なことで爆笑して、子供が作ってくれた歌で泣き、子供と全力でバスケットをして膝をやった。楽しいことは倍になって、別れるのが悲しいと泣いているとナナイも一緒に泣いてくれていつの間にか笑っていた。夢のような時間だった。両親に啖呵を切って出てきたのに、私が村人たちに与えることができたことなんか実際ほとんどないと思う。少しワークをするとすぐに体調を崩してしまうから、バヤニハンの青年たちの応援係に徹していて力仕事はほとんどできなかった。なのに村に水が届いた時、多くの村人に「salamat (ありがとう)」と言われた。正直私にはピンとこなかった。ボランティアのイメージは無償の貢献、立派な人格者がするもの、そう思っていた。おそらく私の両親もそうなのだろう。でも実際に一緒に村人たちと過ごして、こんなに優しい人たちがいるのかと衝撃を受けた。なつ！と呼んで駆け寄ってくる可愛い子供たちの笑顔。少しでも具合が悪いと全力で心配してくれる村人。自分の時間を割いて毎日ご飯を作ってくれたお父さん。ミーティングの帰り道に子供たちとおしゃべりしながら見上げた夜空の星の美しさ。たくさんもらってばかりだった。恩返しなんてできただろうか。ワークを成功させることが恩返しになると思っていて、ワークは大成功した。でも私はいまいち恩返しができたとはいえない。だからいつかまた来て恩返しの続きをしようと思う。

最後になったけど、このキャンパーの皆と一緒にキャンプができて本当に良かった。特にリーダーのあやか、ワークリーダーのごゆいの頑張りには本当にすごかった。心から尊敬します。ありがとう。また、教育のことでアドバイスをくださった先輩方、支えてくださった方々にこの場を借りてお礼を言います。ありがとうございました！

〇りりこ

下見キャンプが終わって約5か月、出発の日は楽しみな気持ち8割と不安な気持ち2割くらいだった。ブノイの人たちに早く会いたい。夏に経験したあの穏やかで楽しい日々がまた送れると思うとわくわくした。しかし今回私たちは絶対に成功させなければならないことがある。キャンプが終わって日本に帰ってきたとき、笑顔で帰ってこれるのかな。そんなことも同時に考えていた。

ブノイに着いたとき、久しぶりの人や風景を見て「ただいま～」と自然に言っていた。そう言える場所ができたことって素晴らしいことだな、そして私はこの場所が大好きだと感じた。

ワークはきつい日もあったが、村人と一緒に歌ったりおしゃべりしたりしながらのワークは楽しかった。「カポイ？」と聞いてサッと木に登ってココナッツを取ってきてくれるあたりフィリピン人は優しいと思った。しかしココナッツタイムが始まってしまうとワークのことを忘れてしまうあたりフィリピン人はやっぱり適当だとも思った。パイプを切っ

てつなく作業をする日は水が出なかったのだが、予定の時間を過ぎても水が出ないときがあった。このまま水が出なかったらと考えると怖かった。私たちはこの村の人たちの生活に密接に関わるプロジェクトをやっているんだと改めて責任を感じた。そんなトラブルもありつつも、ワークは順調に進んだ。これも事前に対策を考えたり、私の知らないところでロクロクさんやリーダーたちが頑張ってくれていたからだと本当に思う。水が高い水圧で出るようになってからたくさんの方々に「ありがとう」と言われた。あるオカマちゃんからは歌のプレゼントをもらった。確か私たちのためにここに来て助けてくれてありがとう **FIWC** みたいな歌詞だったと思う。目の前で最高の笑顔で歌ってくれて涙が出そうになった。自分たちがやったことが少し役に立ったかもしれないという実感を直接自分の目や耳で得ることができたとき、このプロジェクトに関わられてよかったと本当に思った。

フェアウェルパーティもとても楽しく笑顔で帰られると思っていたが、村を去るときには号泣していた。村人たちが私たちとの別れを惜しんでくれた。本当に帰りたくないと思った。みんなが抱き合いながら **mingaw** と言い合っている光景を見て、大きな団体にはできない、学生だけの私たちにはできないことができたのかもしれない。そう思うことができた。

ぬけさんが来てくださった際、こういうボランティア活動は日本人の若者の苦しみ（自分が何者かわからない、孤独などの精神的な貧しさ）と途上国の人々の苦しみ（経済的な貧しさ）を反転させることができるということをおっしゃられていた。すごく納得した。フィリピン人から今の日本人にはないものをたくさん学んだ。村全体が家族みたいで、困



っている人がいたらみんなで助ける。学歴や所属よりも人柄をみる。人と人との情を一番大切にする。とても素敵だ。

1か月あつという間だった。下見キャンプに参加できたから、この村だったから、このメンバーだったから、こんなに楽しかったんだろうと心から思う。想像以上の最高の笑顔でみんなと無事にキャンプを終えて良かった。また必ずブノイに帰りたい。

○ともや

初めて新キャンパーとして **FIWC** に来た自分は、今とは全く違う価値観を持っていたように思う。国際協力やボランティアにはほとんど興味がなかったし、むしろマイナスなイメージを持っていた。もちろん海外への興味は少なからずあったが、キャンプに行くことと決めた時は、その場のノリでなんとなく決めた気がする。しかしミーティングを重ねていくうちに、そんな思いもどこかへ消えていった。キャンパーの皆はとてもキャラが濃くて面

白く、かつとても頼りになる人ばかりで、この人たちとなら一か月楽しく暮らせるだろうなと思った。自分の考えをしっかりと持っていて、それを周りに伝えるのがとても上手くて尊敬した。今思えば、あの時参加のメールを送っていて本当に良かった。

フィリピンに着いてからは、忙しくも充実した毎日で、気が付くと帰国の日になっていた。出発する前は、自分は後発で、すでに村人と仲良しになっている下見メンバーや先発組の中で村に馴染めるのかとほんの少し不安に思ったりしたが、フィリピン人にとってそんなことは関係なく、ブノイに着いたその日から沢山の友達が出来て、思いっきり初めてのキャンプを楽しむことができた。また、キャンプの一番の目的であるワークも順調に進んだのも、自分がこのキャンプを楽しむことができた大きな要因だと思う。ワークは暑い中での作業で、体力的にはきつくて熱を出したりもしたけど、村人たちと沢山話して仲良くなれたのは一緒にワークをしたおかげだと思うし、頑張ったぶん休憩中に村人がとってきてくれるココナッツと、ワーク後サリサリでみんなと一緒に飲むセブンアップがとても美味しかった。そして、ロクロクさんやバヤニハンたちと話していくうちに、ここまでワークが順調に進んでいるのは沢山の人達の支えがあってこそなんだと実感した。ロクロクさんはいつも私たちとワークの成功のために表でも裏でも沢山働いてくれていて、バヤニハンたちも FI のプロジェクトのために朝から働いて協力していて、もちろんキャンパーのみんなも沢山支えてくれて、自分は本当に幸せな環境でワークをすることができていたのだと思う。ワークが成功して水が使えるようになったとき、村人たちから本当にありがと



うと言われた時、ブノイでワークをして、無事成功して本当に良かったし、ブノイを本キャンのワーク地として選んだ下見メンバーに感謝した。そして帰国の日、みんなが号泣しながら別れを惜しむ姿を見て、自分も少しもらい泣きしそうになった。それは別れが悲しかったからではなく、別れを惜しんで涙できるような関係を築けたことが嬉しかったのだと思う。10年後、20年後にもし私たちが帰ってきたら、またみんなと同じように笑い合いたい。ブノイは村人たちが仲良く、支えあって暮らしていた、そんなブノイが大好きになったし、またいつか帰ってきたい。

○あいな

楽しかった。行ってよかった。それが私の率直な感想。バヤニハンとのワーク、子供たちとのソロイソロイ、青年たちとのバレーボール、りりちゃんとのホームステイなど思い出を挙げるときりがないけど本当に毎日が充実していて、楽しかった。また、人を思いやる気持ち、生きる知恵、笑うことの大切さなどたくさんのことをフィリピン人から学んだ。

私が腹痛でダウンしたときには本気で心配してくれたり、わざわざおかゆを作ってくれたりした（もちろん、キャンパーも凄く心配をしてくれ、塗り薬を買ってきてくれたり、つらいときに優しく声をかけてくれた。ありがとう。）。毎日が幸せすぎて、ボランティアに来たはずなのに私の方がフィリピン人からたくさんものを貰っているのではないかと、自分は何か役に立てているのかなと思うことがしばしばあった。しかし、ある村人に「この村に来てくれてありがとう。日本人が来たことで村が明るくなったし、何よりもずっと問題だった水道設備を改善しようとしてくれていることがうれしい。本当にありがとう。」と言ってもらい、ワークが無事成功し水圧が強くなってからは本当に多くの村人に「水圧、凄く強くなった。毎日助かっているよ。ありがとう。」と言ってもらえて、来た意味があったんだ、人の役に立ててるんだと実感することが出来た。私たちがいることで村人が笑顔になって、自分たちも笑顔になることが出来る。ただそれだけのことだけど、そんな関係がすごくいいなと思った。

私がこのキャンプに参加したのは、将来国際協力に携わりたいと言いながら何がしたいのか全く分からなかったため、その答えを見つけたいと思ったから。結果、その答えは見つからなかった。逆に、国際協力とは何なのか、国際教育は必要なのか凄く考えさせられた。教育のワークのときや日本語を学ぼうとする子供たちを見て、フィリピン人は賢いし真面目という印象を受け、学習環境を整えば基礎学力の向上につながり国の発展にもつながると思った。ただ、ブノイの子供たちは学校をさぼっちゃう子がいても本当に楽しそうで幸せそうで、それはそれでいいんじゃないかなと思ったりした。また、フィリピン人はサバイバル力が日本人より圧倒的に優っていて、生きるためには勉強よりも大事なものを持っていると感じた。何を目的として、重視して国際協力をしていくかで大きく変わってくると思うが、本当に国際協力や教育は必要なのか、私はこれから何をしていくべきかを考える大きなきっかけとなった。



また、ワークが成功したときはほっとしたし素直にうれしかった。ワーク開始から終了までを見届けることが出来て本当によかったとも思った。しかし、振り返ってみればワーク作業は一生懸命やったつもりだけど、何か問題が起きた時はワークリーダー・副リーダーに任せっきりだったし、下見に参加してないことでGAMのときとかわからないことが多かったり、下見の大変さも知らないことから、みんなで作っていると分かっているよりも頭のどこかで自分はキャンプを作っているというよりは楽しいキャンプに参加している感がすごくあった。話についていけない自分や力になれない自分がすごく悔しかった。このことは自分にとって大きな収穫であり、次の下見キャンプには参加したいという思いの火種になった。

最後に、このキャンプを楽しく笑顔で終わることが出来たのは、優しくてあったかいブノイの村人、リーダーあやかやワークリーダーごゆいをはじめとした個性豊かで明るい16人のキャンパー、お父さんのようにたくさん話を聞いてくれ私たちをサポートしてくれたロクロクさん、貴重なお話やアドバイスをくださったぬけさん、国内係として家族とコンタクトをとってくださったゆうすけさん、家族や私をサポートしてくれた方々、そんな大好きな皆のおかげ。全員に感謝の気持ちでいっぱい。本当にありがとうございました。大好きな場所、私の第二の故郷ブノイにまたいつかみんなで帰れたらいいな。Daghan salammat!

○のり

私の本キャンプの始まりは遅刻からだった。本当に申し訳ない。そして私は文章力が拙いのため、あまりに長い文を書くと歪みが生じる、だから簡潔に書かせていただく。

とりあえず本キャンプ楽しかった。正直出発前はいろいろあってナーバスだったが、村に到着してからはいろんなことが楽しすぎて、自分はいったい何を考えていたのだろうか、来てよかった、そう思った。

この本キャンプは、春休みにやることがなくて準ニートへと転落した私を真人間へと導いてくれた。楽しいキャンパー、あつきついおなか減ったワーク、優しい村人、みんなの甘く切ないフィリピン人との恋、涙のお別れなどなど、書ききれないほどたくさんの出来事があり、それらが私を救ってくれた要因である。それらの中でも特に印象深い出来事 TOP3 を発表しようと思う。ワークの成功については何位とかではなく、殿堂入りのようなポジションなので以下の中には含めない。

まず第3位は、パトリックの沈静化である。パトリックは幼い少年だが、下見キャンプでは、私の股間にストレートをくれたり、他の子をぶっ叩いたりなど、彼の傍若無人ぶりは留まるどころを知らず、今回のキャンプにあたっての不安の一つであった。しかし、いざ村について彼を見ると、キャンパーととても仲良さげに遊んでいる。まさかと思い私も彼と少し戯れてみると、約半年前までの彼とはまるで別人だった。なんだこの無邪気な甘えん坊は、こんなに幼いとはいえ人はこんなに変わるものなのか、そんな感情が私の心を支配し、人の可能性をまのあたりにした。その後は彼と遊びまくり、心の通い合った友達となった。これが第3位である。

第2位は、フェアウェルパーティの夜、酔って寝ているさとの顔と体に何人かで施した芸術の数々だ。この出来事は一見すればただの悪ふざけだが、私からすればキャンパー



とフィリピン人のチームワークを改めて感じた出来事だ。確かに初めは悪ノリから始まったことだが、あのような一体感が生まれるとは想像していなかった。楽しさだけで言ったら 1 位だ、楽しい思い出をありがとうスワン。あんまり詳しく書くと怒られるかもしれないのでこれ以上は書かない。

第 1 位は、アナライサ一家のお見舞いである。アナライサとは下見キャンプから仲良くさせてもらっていたが、私が熱を出した時に、まさか家族で私の容体を見に来るとは思わず、緊張もしたがうれしくて泣きそうだった。バランガイホールで私、アナライサ家、ロクロクさんで話したとき、一番うれしそうだったのはロクロクさんだったのも印象深い。余談だが、帰国後にアナライサとメッセージをやりとりしていると、サンダルの話になり、私が「日本のサンダルをプレゼントしようか？」と送ると「私のサイズは 36。」と返ってきました。全然かまわないけどサイズの基準ワカサボ。

以上が私の印象深い出来事 TOP3 である。他にも楽しかったこと、うれしかったことは数えきれないほどある。こんな経験ができたのはやっぱりキャンパーみんなが最高だったからだろう。本当ありがとうね!

○みさき

五回目のキャンプ。よく一度下見から本キャンまで経験すると物足りないんじゃない？と聞かれるけど私は違う。初めてキャンプに参加した時、陰で支えてくれる憧れの先輩がいて、何度も助けられた。だから次は私が陰でキャンプを支えたいと思い去年参加したものの、本キャンではワークリーダーをやってワークのことでいっぱいでもそこまで頭が回らなかった。だから今度こそ、そんなキャンパーになりたいと思った。しかし今までほぼ一二年生でやってきたキャンプを三年生の私が、しかも去年ワークリーダーだった私が参加して本当にいいのか考えた。だから今回のキャンプが始まってからも「あの時で終わっていた方がよかったのかな」と思うことも何度もあり悩みもしたが、キャンプが終わった今となっては今回の参加を全く後悔していない。

何度行ってもキャンプは楽しいし最高だ。闘鶏で 100 ペソ負けて皆で『サーヤン!』っ



て言ったのも、トイレを詰まらせて恥ずかしさのあまりに泣いたのも今となっては良い思い出。ブノイの人たちは、言葉にはできないくらい優しいし温かい。子供たちの笑顔、タタイや青年たちの働きっぷりと美しい筋肉、ナナイやアテ達の優しさ、思い出すと今すぐにもブノイに帰りたい。毎日のワークは大変だったけれど、村人たちと汗水流しながらワークをするのは楽しかった。森の中でのワークでは暑さと地道過ぎる作業に気力も

体力も萎えていたが、村人たちのがんばりのお蔭で歌って笑って無事終えることができた。あと、何年も使っていない古いタンクを掃除して使うことになった時に、一緒に掃除をしていた青年が「子供のころ、この中に入って遊んでたんだ」と笑って話してくれて、そこがまた本来のタンクとして命を吹き返すのがとても不思議であり嬉しかった。

過去のワーク地であるサンドニシオ、カンソソを訪れた時には、一回きりの関係ではなく依然と変わらず温かく迎え入れてくれて、これこそ FIWC が築いてきた絆だと思った。どちらの村も私たちが作った道や橋が昔からあったかのように、当たり前の景色として馴染んでいて嬉しかった。ブノイのプロジェクトもいつか当たり前の存在になってほしいと思う。前回のキャンプ地のカンソソでサンドニシオの青年と再会した。彼は「カンソソのフットブリッジを作ってくれてありがとう、洪水の時にとても助かっている」と何度もお礼を言ってくれ涙が出そうになった。サンドニシオの道はサンドニシオだけではなく、その奥のマサバの人にも役立っている、そしてカンソソのフットブリッジはマサバ、サンドニシオの人にも役立っている。こうやってつながっているのはとても素敵なことだと思う。

キャンプは終わってしまったけれど、この5回目のキャンプで気づいたこと、一度下見本キャンを終えてから参加した今だからこそ分かったこと改めて感じたことも沢山あって、また新たな視点からキャンプを見れたこと、参加できたことはとてもよかった。

ワーク最終日、ワーク後に多くのキャンパーがサリサリでジュースを飲んでいる時に、数人のキャンパーと村人がワークの道具を洗ってくれていた。その時、こうやって見えないうところで支えてくれている人がいたんだなって思った。係りの仕事だけではなく、洗濯ものをたたんでくれる人、部屋を片付けてくれる人、寝るために蚊帳を張ってくれる人、食事の時に早く来て準備をしてくれる人、きっと私が知らないだけでまだまだ沢山支えてくれたキャンパーがいた。そのありがたみを改めて感じた。帰国の時に、あいなと悟が「初めてのキャンプで下見メンバーが作ったものについていく感じだった」と言っていたが、私はそうは思わない。こうやって一人一人がきっといろいろな面で支えてくれていたからワークを含めキャンプは大成功したのだと思う。だから全員で作り上げたキャンプだ。最後に、リーダーのあやかには心から感謝しています！キャラの濃すぎるキャンパー達をまとめて最高のキャンプに導いてくれて本当にありがとう。そしてキャンパーのみんな、ロクロクさん、ダディ、マミー、ブノイのみんなのことが本当に本当に大好きです！

Daghan Salamat !

私のささやかな夢は、将来5年、10年経った時に村人たちが「昔、日本人がこの村に来て一緒に水道のワークをしたんだ！一緒にお酒飲んだり、ディスコしたり、遊んだり、あの時はにぎやかで楽しかったなあ」って楽しい思い出として、誰かに伝えてくれることです。

○さとり

今回初めてフィリピンキャンプに参加した。楽しみな面もあったが正直行く前は不安なことの方が多かった。現地の村人と仲良くなれるだろうか。自分の英語力で大丈夫だろう

か。MTG や国内合宿で先輩方からキャンプは楽しい、何回も行きたくなくなるという話を聞いたが、自分はどうかだろうか。二度と行きたくないなど思わないだろうか。そんなことを思っていたが予想はいい意味で大きく外れた。一日一日がとても濃くてすべてが未経験なことばかりで新鮮だった。村人は自分たちを温かく出迎えてくれて、さまざまな面でサポートしてくれた。夜に村人とお酒を飲みながら歌ったり、同世代の村人たちとディスコしたりする日々は本当に楽しかった。



しかし、きつかったこともなかったとはいえない。到着してから最初の三日間は特にきつかった。慣れない環境、先発男一人という不安。GAMではほとんどの英語を聞き取ることができず、自分の無力さを感じていた。そんな時、村人が話しかけてくれた。自分の拙い英語をしっかりと聞こうとしてくれて、自分は少し不安を抱えているということを言うと、村人は大丈夫だよと笑顔で慰めてくれた。いつの間にか村人 10 人くらいが集まってきてくれていて、みんな自分を慰めてくれていて、正直来て三日目で村人の温かさに泣きそうになっていた。同時にこの村人のためにワークを絶対に成功させようと思ったし、自分の必要性に疑問を持つようなくならないことを二度としないとも誓った。そして自分にできることはこういう村人たちを楽しませて笑顔にすることだと気付いた。それしかできなかったと思う。

セクシーダンスはお酒と勢いで生まれたものだがうけてよかった。Are you バイオット？と聞かれることもあったがまったく苦ではなかった。フェアエルでやった白鳥は大人たちにはどう思われているか分からないが青年たちにはうけたのでよかった。ブノイガマイの子たちから冷酷な目で見られたがまあ大丈夫だと思う。こういうことがキャンプに必要なことか分からないが村人やほかのメンバーが笑顔になるのを見てうれしかった。

キャンプを通してワークキャンプについての自分の考えが違うことに気付いた。自分はボランティアとワークキャンプにほとんど違いはないものと思っていた。だから一方的で自己満足になりえないものと考えていた。しかしそれは大きく違った。FIWC が行うワークキャンプはボランティアとは違い、村人と共に協力して、仲を深めて行うものだ。決して一方的ではないし、むしろ村人から学ぶもの、キャンプから得るものの方が自分たちが提供できるものより何倍も多い。村人が提供してくれた家の中でいっしょに暮らし、村人が作ってくれたご飯を食べて生活する。日本人だけでなく村人の支えが必要なものがワークキャンプなのと思った。

最後にこのキャンプを支えてくれた人に感謝したい。毎日食事を作ってくれたり、ワークをしてくれたり温かく見守ってくれたりする村人の支え、キャップのあやかや下見キャ

ンパー、ロクロクさんの支え、水が出なくなった時ワークリーダー、ワーク副リーダーが早起きして山に登ってパイプを見に行ってくれたり、毎日だれかがワークの時に飲む水をついでくれたり、洗濯物をたたんでくれたり、他にもいろんな支えがあったからこそそのキャンプだったと思う。本当にありがとうございました。

○ゆうか

今回初めて参加したフィリピンキャンプ。参加したきっかけは小学校の時から興味があった国際協力について現地の人たちと交流したりワークをしたりしながら1か月生活するのが楽しそう！と単純に思ったからだ。フィリピンに行く前に、FIの先輩方やフィリピン経験者のみんなから、話を聞いたときに「フィリピンに行ったらいい意味で価値観が変わるよ！」「日本じゃ無いような刺激がたくさんあって面白いよ！」って聞いて、ワクワクしながら出発した。

福岡から韓国経由で長旅の末、ブノイに着いた。そのとき村の子どもたちが駆け寄ってきて初めて会ったばかりの私に手作りのレイをくれたときに、不安だと思っていたことが全部吹き飛ぶくらいうれしかった。

ブノイで1か月生活してすごく素敵だなと思ったことは、村のみんなが大人も子どもも若者も、みんな仲が良くて繋がっていたことである。日本だと、同じ地域に住んでいても顔を知らない、話したことがない人の方が多い。しかし、フィリピンはみんな知り合いで繋がっているから、何か困ったことがあったらお互い助け合うし、楽しいこともみんなで共有する。それは日本人に対しても同じで、ディスコやスポーツはいつも笑顔で誘ってくれるし、私がホームステイ中に風邪をひいたときは、村の子どもたちがホームステイ先まで来てくれて、心配そうに「大丈夫？大丈夫？」って聞きながら代わる代わる私のおでこを触って行って、身体はだるかったけどなんだかすごく幸せだった。(笑)



そんな風に過ごす中で、来た初めのころは全く知らない土地だったフィリピンは、村の人たちやメンバーのおかげで大好きな場所になっていった。ワークしていた初めのころは、ワークしながら村の人地と色々な話ができるし、身体動かすのは楽しいな、と思っていた。だけど日がたつうちにこの村のみんなの生活が少しでも便利になればいいな、私に何ができるのだろう、みんなの助けになりたいなと思いながらワークをするようになっていた。今回成功したこのワークが、これからもずっと村の人たちに使われて行ってほしい。

帰る日の前日のフェアウェルパーティの時は、次の日にブノイを離れることに対して違和感があるくらいブノイでの生活が楽しかった。だけど、帰る

当日に村のみんなが BRGY ホールに集まってハグしてくれたり、リメンバランスをくれたりしたときに、みんなと一緒にワークしたり、ディスコして歌ったり、一緒にじゃれあって遊んだことを思いだしてしばらく会えなくなるんだって思ったらびっくりするくらい泣けた。いつかまた来たら会えるって思っていたけど、離れることが本当に悲しかった。でもこんなに悲しくなるくらいブノイのことを大好きだと思えるようになって、本当に来てよかったと思った。

たった 1 か月だったけど、ブノイは私の帰る場所になりました。またフィリピンに行くときは、ただいま〜って言いながらみんなに会いに行きたい！

最後に、一緒に 1 か月過ごしてくれたフィリキャンメンバーへ。みんなのおかげで 1 か月間毎日ほんとに楽しかった！このメンバーと一緒に行って、ワーク成功させることができてよかった！ありがとう！

両親へ、たくさん心配かけたけど行かせてくれてありがとう。のおかげで本当にいい経験と素敵な人達との出逢いに恵まれました。他にも友達や FI の先輩方など、周りの人のおかげで今回参加することができました。本当にありがとうございます。Daghan salamat!

○せーじゅ

私はフィリピンキャンプが大好きだ。なぜなら、私たち日本人とフィリピン人である村人が、とても近いところで時間を共にすることが出来るからだ。私はこれまでたくさんの時間を村人と過ごしてきて、フィリピン人が大好きになった。私たちはそれまで違う国に住んでいて、言葉や食べ物、生活する環境など、異なる文化のもとに生きてきた。しかし 1 ヶ月の間、土を掘ったりコンクリートを練ったりと一緒にワークをしたり、1 つのコップを回しながらお酒を呑み冗談を言い合ったり、同じ屋根の下で寝たり同じテーブルで同じご飯を囲んだり、たまには村人と一緒にリーゴしたり、とにかく物理的にすごく近いところで共に生活することで、自然と心の距離は近くなる。私が一方的にそう感じているだけかもしれないが、村人が、バヤニハンでワークに参加してくれたり、毎日 BRGY ホールへと足を運んでくれたり、Farewell party には小さい子からお年寄りまでたくさんの方が来てくれて、お別れのときには泣いてくれて、日本に帰ってきた今でも Massage のやりとりをしたり、こんな村人のことを考えると、村人も私たち日本人のことを好きになってくれたんじゃないかなと思う。これが、私たちの活動のいいところだと私は思う。ただ単に村人がより暮らしやすいようにインフラ整備をするのでなく、村人を巻き込んでキャンプをする。私たち FI の距離感だからこそ村人をこんなにも巻き込めるのだと思う。村人も汗を流して自発的にしたことだから、日



本人がいなくなった後も大事にしてくれると思うし、メンテナンスや村の問題、他にも個人が抱えていることなどについて、FI との関わりをきっかけに、いい方向に少しでも変わっていってくれれば、私たち日本人が村で、Bonoy でワークキャンプをしたことっていうのは、意味のあることだと思う。もちろん、私たちの活動が与える影響というのはいいいことだけではない。どこかで悪影響を及ぼしているかもしれない。だから私たちは自分たちの活動についてよく考え慎重に行動しなければならない。日本の常識とは違う異国で活動をしている私たちにとってこれはすごく大事なことだと思う。

私はフィリピンキャンプに携わるまでは、ボランティアっていうのは一方的なものだと思っていた。しかし、ワークは一緒にするしキャンプ中は村人に助けられて生活をしているし、初めてキャンプに行ったときはこんなボランティアもあるのだと思った。正直私は、フィリピンキャンプをボランティアの一言で片づけることがすごく嫌いだ。別にボランティアに詳しいわけではないが、友達や家族にボランティアって変だもん。私たちと村人との1ヶ月がボランティアって嫌だ。私はやっぱり、村人に会うためにフィリピンに行っている。だって村の人たちが大好きだから。最後に、これまでフィリピンキャンプに携わってくれたすべての方がいたからこそ、今のフィリピンキャンプがあると思います。ありがとうございます。

〇ぐっさん

また行くとは思ってもみなかった4回目のフィリピンキャンプ。参加を決めたのはただ今回のキャンプの下見キャンパー6人のことが好きだったので、彼らが中心となって作るキャンプに是非とも参加してみたいと思ったからだ。参加したらこんなこと考えながら過ごしてみよう、みたいなことは何も決めずに出発を迎えた。



行ってみると相変わらずの日本とはまったく異なるフィリピンでの生活、そして元気で優しい村人が待っていた。今回で自身3つ目の村の滞在だったが、やはりどこの村の人もとえ貧しくてもいつも幸せそうで、改めていい所だなと実感した。4回目ということもあり、今回は人見知りするようなこともあまりなく、初めてのキャンプに比べると大分たくさん村人と話した。その会話はもちろん日本でのようにスムーズではなかったが、お互いに必死に相手の気持ちを理解しようとしてくれているのがとても伝わってきて、同じような内容の質問を何度もし合ったのを覚えている。今回のキャンプでは泣かないかななんて思っていたが、最終日の村を出発する際、村のほとんど話したことのない男の子が日本語で「さよなら」と日本語教室で覚えた一言を言ってきた時、自然と涙が出てきて急に別れが辛くなり、また必ずブノイに戻ってこようと思った。本当に最高のキャンプだった

など思う。

今日本に住んでいる自分は、好きなことやりたいことがとても自由に出来ているんだということ、この有り難みは今回キャンプ全体を通して感じたことのひとつである。これは教育プロジェクトの中で、ブノイ村（フィリピン）の子供たちの中には金銭面の問題などで高校、大学などへの進学がたとえ行きたいという気持ちはあっても叶わず、結果人生の将来における選択肢が限られてしまうことや、ワークの中でも、ご飯を食べたくても満足に食べるものが無いということなどを知って感じたことだ。ただそこで思ったのは「幸せとは何なのか？」ということである。やはりキャンプに行くとこれを考えさせられる。もちろんお金があることが幸せとは限らないが、だからといってやりたいことがそれで出来ないのは...というように、考え方によってその答えは人それぞれなのでなかなか答えがたい問題ではある。

ただ今までずっと考えてきて出た自分なりの現段階の答えとしては、それは今置かれている自分の状況を受け入れられることなんじゃないかなと思った。今回のキャンプ中、日本人のサリサリなどのお金の使い方を見て幸せそうだなと思った村人もいただろう。逆にいつも笑顔で生活している村人を見てそれを羨ましく思ったキャンパーも自分を含めいたと思う。だからといって仮にお互いの生活を入れ替えたならおそらくまた同じようなことを考え、失って初めて気づくことが出てくると思う。結局はそれほどどちらも幸せなことであり、今ある生活に満足出来る心の余裕のようなものが持てることこそが幸せにつながるのではないかということの一つ大きく感じた。

今回のキャンプ、村滞在初日のぎっくり腰を除いて毎日が充実していました。我々の滞在を心から受け入れ心から楽しんでくれたホームステイ先のファミリーをはじめとするブノイ村の人々、そして共に兄弟のように毎日を過ごしてきたキャンパーの仲間に本当に感謝したい。

〇くるみ

入学式で FIWC のピラをもらった時点で、この団体に参加すると決め、報告会等で話を聞いてからは絶対キャンプに参加すると決めてからの、念願かなっての初キャンプ。人数



が多く、かつ新キャンパーの数も多いことから期待に膨らむキャンプであった。ワークの詳細やキャンプの注意点なども、自分にはわからないことばかりであり、事前ミーティングではあまり意見することができず、ふがいないと感じていたが、開き直ってほかのキャンパーの説得力の強さや意見の仕方を学ばせてもらった。フィリピンに行って村人と共に過ご

し、共にワークしたことで多くを学んだが、それだけでなく、様々な考え方を持つこのキャンパーたちと多くの時間を共にできたことがフィリピンに参加してよかったと思う理由でもある。実際のフィリピンの景色は想像していた景色よりもはるかに美しかった。きれいであった。生きている環境も歴史もまったく異なる私たち日本人とフィリピン人の感覚がずれていることももつともであると思った。大音量で音楽をかけながら作業をする彼らは陽気で、筋力がすごく、笑顔も輝いていた。日本人をもてなそうとしている心遣いが私たちキャンパーを幾分安らげてくれたことか。本当に村人には感謝している。村では子供たちの笑い声が絶えることもなく、青年たちの楽しそうな話し声も絶えることがなかった。当然私たちキャンパーの笑顔もとぎれることがなく、本当に幸せであった。ワークではシャベル等の扱いが難しく、あまり力になれることができなかったため、パニゴロ隊に徹した。青年たちのお喋りに付き合うのは楽しく、お喋りしながらも、ワークを進めて行く村人たちに尊敬の念を覚えた。時には、日本人キャンパー同士で語り合うこともあった。中でもごゆいから聞いた、村人たちが world vision ではなく FIWC を選んだ理由をこの楽しい時間を過ごしたかったからだというようなことを話していたということに、自分たちがきて本当によかったのだなと思えた。それも含めて下見キャンパーは本当にすごいと思った。問題を探していくところから始めることの大変さは計り知れないと思う。本キャンはとても楽しく苦しさがほとんどなかつたために、下見キャンプの苦しさがあまりそうぞうすることができない。しかし、ワークが無事に終わった瞬間に下見キャンパーが涙していた姿は本当に忘れられないと思う。新キャンパーにはわからないような不安や悩みがたくさんあったのであろうとは思いますが、なにより責任感の強さであったのかなと思う。人々の生活に関わる水道設備を改善するということのリスクの大きさは、少しでも水の出の調子が悪いときには感じることもできた。それに反し、村人たちのあまり深刻には考えていないような素振りでのワークの様子からは、大したことではないように感じることもあったが、ワークが終了して、村人たちが感謝していると喜んでいたときには、本当によかったと思った。今回、このワークキャンプに参加して思ったことは、FIWC の活動は本当に素晴らしい！それはインフラ整備をして人助けをしているからということではない。このインフラ整備は単なるツールであると思う。この活動を通してたくさんの笑顔にふれることができるということが大切であると思う。インフラが整っていないくても、問題があっても村人は過ごしていけるし、実際に過ごしてきている。そこでわたしたちが関与することで村の人達の人生に関わることになる。自分が彼らの笑顔の一因になることができるということはとても幸せであると思うことができる3週間であった。あと、幸せだったことはご飯がおいしかったこと！！いつもたべすぎてごめんなさい！笑 キャンパーのみんながひいているのを感じながらも毎食おいしくていっぱい食べてしまいました！笑 キャンパーみんな大好きです！

○かな

今回私は初めてキャンプに参加した。フィリピンに行くのは初めてだった。アジアのど

こにも行ったことがなかった私はフィリピンでの生活があまり想像出来なかった。MTG でリーゴ、ラバの説明を受けてもいまいち掴めず、ワークの流れもぼんやりとしか理解できていない状態だった。不安だった。下見キャンプのメンバーの“成功させたい”という強い思いを MTG を進めるうちに大きく感じるようになる一方、未だ実感を持っていない自分とみんなとのギャップを感じ、本



当に大丈夫かと中途半端な気持ちのまま過ごしていた。しかし、テーマ・T シャツ・イベントをみんなで決めキャンプの準備を進めていくうちに、“絶対にこのメンバーの一人としてワークを成功させたい”とおもうようになった。下見メンバー、OBOG の話を聞いてフィリピンの人々に会えるのを楽しみにフィリピンへ向かった。

後発で向かった私たちが村へ到着したころ、すでにワークは大きく進んでいた。初めての乗り物、日本と真逆の気温、村の様子。ただ、私はフィリピンに来たのだと実感するばかりであった。村人と親しく話す先発・中発のメンバーをみて、その場の雰囲気についていくのがやっとだった。しかし、そんな緊張を和らげてくれたのは子供たちであった。突然来た私たちのもとに駆け寄り、名前を聞いてくれた。到着 3 日後から参加した村人とのワーク。生い茂る森の中をビーチサンダルでどンドン進む姿、さくさくと作業を進めて行く姿に驚いた。休憩だといって、背の高いココナツの気にスルスル登る村人たちにただただ唾然とした。みんなで飲んだもぎたてのココナツ！初めてのココナツ果汁は…少し薄かったけれど、みんなでわけあって過ごす時間がとても楽しかった。

長いようで短かったキャンプはワーク成功という結果を迎えることができ、無事終えることができた。リーダーとワークリーダーが涙を流し喜んでいて。みんなで目標とし頑張ってきた分とても嬉しかった。キャンプリーダーとワークリーダーが涙を流し喜んでいて。一方で、私の中になんだか悔しい気持ちもあった。二人と同じくらいの思いでワークに臨めていなかったのではないかと感じた。フィリピンでの生活は夢のような時間であったと今感じる。そうはいつでも休暇のような日々が続くわけではない。疲れる日ももちろんあった。しかし、楽しかったと心から言える。フィリピンの人々はみんないつも笑顔を向けてくれた。毎日食べていたごはんが、ダディが善意でつくってくれていたものだと知ったのは、フィリピンについて数日経ってからであった。いつも手を握ってきてくれる子供たち、常に気遣ってくれる村人への感謝はずっと忘れることはできない。短い二週間はこれまでにないほど濃かった。村の人々が、楽しかったなあとおもいだしてくれるようなキャンプにできていれば嬉しい。

○らん

フィリピンに滞在して2週間ちょっと。後発での参加だったため短い滞在期間ではあったものの、フィリピンがここで私に感じさせてくれたことも得たものも沢山あり大変有意義な時間を過ごすことができた。フィリピンの空港に着いた時の水を含んだようなどんよりとした空気感を懐かしく思う。セブ島から船に乗り、レイテ島に到着。そこからまたバスを走らせ長い旅の末ようやくキャンプ地ブノイに着いた。後発ということもあって気おくれしていた私達の不安をよそにブノイの人々が満面の笑みで私達を村に迎えてくれたことは大変ありがたいことだった。

到着の次の日から始まった炎天下の中でのワーク。山を登り作業を始めるため体力的には相当以上にきついものであったが、村人たちが率先して動いてくれたおかげで順調に進み予定よりも早くワークを終えることができた。想像していた辛いワークとは裏腹にフィリピンの村人は常に笑顔で私達を気かけながら働いてくれた。のどが渴いたのなら、休憩がてらにココナッツを収穫してくる村人の行動は、かなり非現実的で非常に強く印象に残っている。これぞ自然の恵みだ！笑

フィリピンの生活は新鮮でまさにワイルドな感じ。当たり前とと思っていたことが当たり前じゃないということ。確かに、日本の生活に比べると不便といえるかもしれないが、一度も苦と思うこともなくこの村の生活を楽しんだ。蛇口から水がでないことも日常茶飯事であるが、そうなれば村の誰かに伝えればよい。ここでは、「不便＝不幸せ」ではないのだ。むしろ不便であるからこそ村人同士の日々コミュニケーションは不可欠で協力し合って生活している。この村で生活して、地域のコミュニティーの基盤がしっかりしていて人と人とのつながりを大切にしているように見えた。たとえお金がなくても生きていけるほどの心強いコミュニティーがそこにはあった。日本も学ぶべきこの地域のコミュニティーの絆の強さだ。なんだかこの村の人々はうらやましく思えた。まるで一地域みんなが大きな家族で地域全体は守られているという印象を受けたからだ。村人たちとの会話で印象に残ったものがある。「今月だけいつもよりも多くお金を稼げたらどうする？」という私の質問に、みんな口を揃えて「そりゃ、そのお金全部使ってみんなで酒を買って飲むさ～♪そして、また明日からは貧乏生活！」とげげら笑いながら答えた。幸せであればお金はいらないという彼らの楽観的な考えは、日本では考えられないと思うであろうが…私にとってはなんだか「生」を謳歌しているフィリピンの人々がかっこよく、輝いてみえた。

このフィリキャンに参加して、沢山の価値観に触れることができたことをうれしく思う。地域のコミュニティーに入る機会はないもので学生にしかできない、そして



FI だからこそできた貴重な体験だったと思う。また、FIWC はただのボランティア団体ではなく、現地の人と働くということを重点に置いているため、私達が帰ってからの維持が大切だ。私のかつて思っていた「ボランティア」の概念は少し間違えていて、「ボランティア」の真髄は、自分たちが活動に協力することで、村のよりよい未来のために村人に考えてもる機会を与えるだけということであるということに気づかされた。住んで生活するのは、あくまでブノイの住民たちで、私達の役目は、村を少しでも活性化することにある。ウォータープロジェクトが無事終了し、住民の喜ぶ顔を見て、私達が行くことに意味があるということを実感し、このフィリピンに参加できたことに大変喜びを感じた。

先入観をなくして、新たなレンズで世界を覗くことで今まで見えなかったものが見える。多くの視点から物事を見るということの大切さ。カメラのレンズを変えて写真を撮るように同じ景色も、人も、物も考え方一つで大きく変わる。ここで新たなレンズを得たことは私にとって大きな収穫だ。ブノイキャンプを通して出会った人々への感謝の気持ちを忘れずに、このフィリピンキャンプで学んだことを糧としてこれからも人生を謳歌したい。このプロジェクトを引っ張ってくれたリーダーあやかと、ワークリーダーごゆい。本当にお疲れ様でした！キャンパーのみんな大好きです！ありがとう！サラマーン！^^

○なつき

私は大学に入ったら学生のうちにしか出来ないことをしたいと思っていた。そこで考えていたのが海外ボランティア。でも最初の一年のときは、海外ボランティアやっぱ不安や。と思ってまずは国内でボランティアしようと考えて、一年の夏に東北にボランティアに行ってきた。私は、ボランティアというと、自分たちが何かをしてあげるんだという認識があった。しかし、私は東北に行ってボランティアという言葉に対する認識が変わった。被災したおばあちゃんやお母さんたちがご飯をごちそうしてくれたり、手作りのキーホルダーをくれたり、自分たちがボランティアをしに来ているのに与えられるものや学ぶものが多かった。

そして、私はもっともっといろんなところに行って自分に出来る限りのことをしてたくさんのお話を学びたいと思ってフィリピンキャンプに参加する決心が決まった。でもやはり、参加を決めるまでは、現地の生活



に慣れることが出来るのか、病気にならないか、またテロ事件とか報道されたりして楽しみもあったが不安の方が強かったと思う。

後発隊で出発したため、最初は何が何だか分からずに現地での生活に慣れるのに必死だった。村に着いてそうそう子どもたちが駆け寄ってきて「what's your name?」と次から次にや

ってくるのに圧倒され、寝不足気味のテンションだった私にとってこれは体力がないとや
っていけないと最初に気づかされた。子どもたちは毎日元気で全くルールの知らない遊
びに誘ってくれたり、踊ったり、マジックを見せられたり、(笑)遊ぶものが限られてい
る中でいろんな遊びを見つけたりして毎日がすごく楽しそうで皆心が豊かだった！！イベ
ントのときとかみんなあっつい中一生懸命に日本語書いてくれるし、縄跳び頑張って飛ば
うとしてるし何事も一生懸命に頑張っている姿がキラキラしてて、自分もそういう気持ち
忘れてたなぁと後々気づかされた。ワーク初日目は炎天下の中人生で初めて足の裏に刺激
が来るくらいデコボコした道を通ったり、泥沼を飛び越えたりしてワーク地に行くのでさ
えきつくてたまらなかったが、ワークをするにつれて慣れてくることが出来た。ワーク中
は自分の力じゃ全然穴掘り、穴埋めが進まず、ただ体力だけなくなって「カポイ？」って
聞かれまくって、「ノーカポイ」って答えるけど、終いには「ナツキ！！スマイル！」っ
て言われて自分そんなにひどい顔してたのかと思って、無理やりスマイルを作ったけど数
分後にはもうスマイルではなかったと思う。それぐらい暑くて、きつかったし、あまり役
に立たなかったけど、最後にみんなでパイプを埋めた達成感は最高だった。このワークは、
日本人だけの力では決して出来なかった。ブノイの村人と日本人両方がいて成功するこ
が出来たと思う。

学生のうちにこのような貴重な経験をする事が出来てすごい良かった。楽しいことも、
嫌なことも、いろいろあったけれど全て日本では経験することが出来なかった。こうい
う経験が出来たのもいろんな人からの支えがあったからこそだと思う。フィリピンに行かせ
てくれた両親、ブノイの村の人々、そして何よりもキャンパーのみんな、他にもいろん
な人たちに支えられて、今の自分があると思った。本当にありがとう！！このメンバーで
キャンプ出来て良かった！！

○あや

私は高校生の時から、大学生になったら絶対
海外でボランティアがしたいとずっと
思っていた。私は海外、特に東南アジアのあ
の独特な雰囲気が大好きなため、フィリピン
でボランティアをしている FIWC の存在を
知り、即応募した。秋頃からミーティングが
始まり、あやかをはじめ他のキャンパーはと
てもしっかりしていた。しかし私はキャンプ
の話やワークの話聞いても、いまいちなん
なものなのか想像がつかず、まあなんとかな
るよね！精神でブノイ村に到着した。到着し
た途端に温かく出迎えてくれた子供たちを
見て、イスラム国に捕まるかも！という不安



は完全に飛んでいった。ワークは私の想像以上に力仕事だったので、パイプを埋めるために土を掘っていく作業の時は、私が掘るよりもベテランのバヤニハンたちが掘るほうが早いし効率もいいからとても申し訳ない気持ちになった。筋トレしてこればよかったと思った。なので私はパニゴロ隊になることにした。ワークがすべて終わった頃、村の人々が嬉しそうな笑顔で、水が出るようになったよ！ありがとう！と報告してくれて、私も嬉しい気持ちでいっぱいになった。ワークに参加してよかったと思った。ワークを通して多くの村人と交流ができ、優しさに触れ、共に笑い、フィリピンが本当に好きになった。朝早くから爆音で流れる私の大好きな曲。夜はディスコで踊り、満天の星を見ながらホームステイ先に帰った。フィリピンでのひとつひとつのことが本当に充実していて楽しかった。ホームステイ先の子たちとファッションショーをしたり深い話をしたり、親友と呼べるほど仲良しだったので、お別れの日には本当に悲しくてお互い3日前から泣いていた。村の人たちは私が歩いていると、後ろ乗りなよ！と、すぐにバイクに乗せてくれて家まで送ってくれたり、美味しいパンをくれたり、私が財布をなくしたらみんなで探してくれたり、何かから何までお世話になって感謝の気持ちでいっぱいになった。村のどこにいても Hi Barbie! Aya!!と声をかけてくれて、嬉しかった。ブノイ村では障害を持った子供が2人いたが、他の子供たちはその子たちのことを special child と呼んでいて、いつも一緒に遊んでいた。日本では、「障害者」という字からもわかるように、いかにも障害を持った人という感じがする呼び方をし、障害を持った人は仕事にも就きにくく、友達と一緒に遊ぶ姿もあまり見られない。それと比べフィリピンでは障害を持った人と健常者の間に壁をまったく感じなかった。フィリピンは気候も暖かいが、人も温かいと思った。必ずまた、大好きなブノイ村に行きたい！！だーいすき♡





参加メンバー 【名前、(所属大学・学年) : 各担当係】

江原 文香	(九州大学 4 年) : リーダー
呉 唯意	(九州大学 3 年) : ワークリーダー
高原 奈津美	(九州大学 3 年) : 教育リーダー
林田 梨里子	(九州大学 2 年) : 副リーダー
田中 友也	(九州大学 2 年) : ワーク副リーダー
池山 愛奈	(九州大学 2 年) : 教育副リーダー
小林 典史	(西南学院大学 2 年) : 保健
陣内 美咲	(西南学院大学 4 年) : 保健
岩永 悟	(福岡大学 2 年) : 会計
大城 結香	(福岡女子大学 3 年) : KP
工藤 星授	(九州大学 4 年) : 会計/KP
山口 航平	(九州大学 4 年) : イベント
高濱 蘭	(西南学院大学 4 年) : イベント
祁答院 夏生	(西南学院大学 3 年) : イベント
樋口 綾夏	(西南学院大学 2 年) : イベント
野中 くるみ	(九州大学 2 年) : ホームステイ
平野 佳奈	(西南学院大学 2 年) : ホームステイ
田口 慎	(九州大学 3 年) : 国内係

